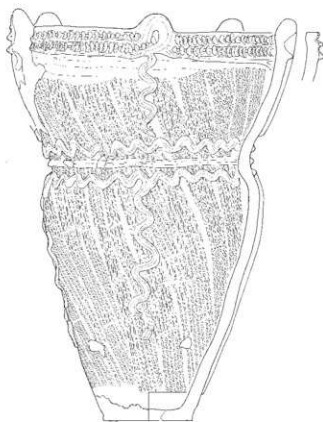
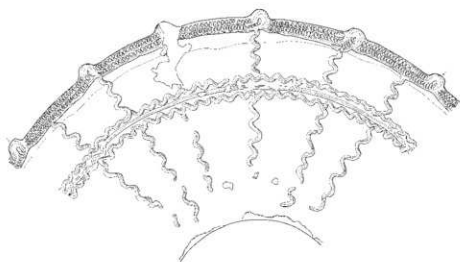


0 10cm 1:4

第56図 埋設伏甕

口縁部には5単位の突起をもち、突起から垂下し、口縁部文様帯を区画する隆帯に接して器面を区画するとともに、幅狭い口縁部文様帯を形成している。

口縁部文様帯には、2条の沈線が横走し、沈線間には、半截竹管状工具の内面を、下方から上方に押し上げるように押圧している。

地文は撚り糸しを縦から斜位に施文している。地文上に添付された、口頸部と胸部を区画する隆帯の上下に、蛇行する隆帯が並走するとともに、頸部と胸部には、口縁突起の位置から、蛇行する隆帯が垂下している。

3. 土壌

高麗石器時代住居跡遺跡第2・3次調査では、75基の土壌が検出された。内訳は、第2次調査が34基、第3次調査が41基である。このうち縄文時代の土壌は、第2次調査が4基、第3次調査が13基である。第2次調査では、長軸の長い土壌が多く検出されており、土塁の構築時期とも関連する可能性がある。また、長軸と短軸の差が少ない長方形ないしは方形の土壌が第3次調査で検出されている。いずれも遺物は殆んど出土しなかったため、時期が明確ではない。

縄文時代と考えられる土壌の数は少ないが、住居跡群の内側に位置するものと、住居跡群の外側に位置するものが存在するようである。

第3次調査で検出された土壌は、複数基が近接する傾向があるが、それぞれの位置が離れているため、調査範囲内では土壌同志あるいは土壌と住居跡との有機的な関係を確認するには至っていない。

第1号土壌 (第57・66図)

G-12グリッドに位置する。調査区外に延びるが、円形の土壌と想定される。現存部の径は1.03m、深さが0.20mである。埋土から土器の底部が出土した。

口縁部直下と底部直上では、器面がナデ整形されており、地文が消失している。

底部には焼成後に、外面から敲打によって孔が穿たれていた。孔の径は3.0cmで、周囲に面取りなど整形痕は認められなかった。

内面には、底部から10.0cm上面に、幅約7.0cmの焦げ痕が認められたことから、煮沸用の深鉢として使用された土器が転用されたものと考えられる。

胎土は小礫混じりの砂粒を多く含み、色調は鈍い橙色である。口径26.8cm、底径9.3cm、器高42.0cmである。

第66図1が、第1号土壌出土遺物である。撚り糸しを地文とする加曽利E式土器底部破片で、推定底径7.8cm、現存高5.2cmである。本土壌は縄文時代に属する。

第2号土壌 (第57・66図)

F-11グリッドに位置し、土塁の盛り土下部から検出された。短径0.68m、深さ0.30mで、調査区域外に延びるため、全長は不明である。埋土から、かわらけや縄文時代の石器が出土した。

第66図2・3が、第2号土壌出土遺物である。2はかわらけで、底部に糸切り痕をもつ。推定口径10.7cm、器高2.8cm、推定底径6.3cmである。

3は打製石斧で、刃部と基部が欠損している。

第3号土壌 (第57・66図)

G-11・12グリッドに位置している。第2号住居跡の炉を壊しており、南西壁の一部が、第82号土壌に壊されていた。短径1.45m、現存部の長径2.44mの長方形で、第2号住居跡床面からの深さが0.40mである。土壌底面から、第2号住居跡の柱穴P3、P4が検出された。

土壌は、埋土や形状から近世と想定されるが、第2号住居跡を壊して構築されていたためか、縄文土器がややまとまって出土した。

第66図4～21が土壌埋土から出土した遺物である。4～14は、燃糸しを地文とする加曽利E式土器の口縁部から頸部の破片である。4は口縁部の丸みが弱いことや、7のように扁平化した隆帯間と隆帯側に沈線が明瞭であること、11のように幅広い頸部無文帯をもつことなどから、第66図1・4・10などの第1号住居跡出土土器よりも新しい段階と考えられる。13～15は頸部破片。18・19は鉢が他土器であろう。21は磨石破片である。

第4号土壌 (第57・66図)

G-11・12グリッドに位置し、第3号土壌に隣接して検出された。長径3.38m、短径1.00mの長方形である。第2号住居跡の床や柱穴P5を壊していたため、埋土からは縄文土器片が出土した。床面からの深さは0.40mである。

第66図22～29が第4号土壌出土遺物である。22は口唇部に沈線が廻る波状の口縁部破片である。23・24は口端が内湾ないしは直立気味に開く深鉢で、24は連弧文系土器であろう。25・26は隆帯による懸垂文を持つ土器で、25には、斜めに垂下する隆帯上に刻みが施されている。27・29には斜位の沈線文が施された曽利式の土器であろう。

第5号土壌 (第57図)

F-11グリッドに位置し、第1号溝跡を壊して構築されていた。長径1.54m、短径0.56m、深さ0.46mである。埋土は、ロームブロックが多く含まれた1層のみで、埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

第6号土壌 (第57・67図)

H-12グリッドに位置し、グリッドビットと重複関係にある。皿状に掘り込まれ、埋土には焼土や炭化物粒子が含まれていた。石器の破片が出土したが、土質から中近世の所産と判断した。長径0.72m、短径0.48m、深さ0.10mである。

第67図30が出土した。打製石斧で、基部と刃部が欠損している。

第7号土壌 (第57図)

G-12グリッドに位置し、中・近世に削平された平場の北東端で検出された。現存部は径が1.74m、深さが0.34mだが、大半が調査区域外に延びるため、詳細は不明である。

第8号土壌 (第57・67図)

G-12グリッドに位置し、中近世に削平された平場の東端で検出された。長径1.40m、短径0.85m、検出面からの深さが0.50mである。埋土は1層で、中近世の所産と判断された。埋土には縄文土器が混入しており、第67図31～36が出土した。31・32、36が勝坂式、33・34が加曽利E式である。35は手捏ねのミニチュア土器で、底面上に指頭圧痕が認められる。砂粒を多く含む雑な作りで、縄文時代中期後半に属するものであろう。

第9号土壌 (第58図)

G-12グリッドに位置し、中・近世に削平された平場の北東端で検出された。調査区の西壁しており、大半が調査区域外に延びるため、全容は不明だが、長方形で小型の土壌であろう。壁に接して小ビットが掘り込まれている。遺物は出土しなかった。

第10号土壌 (第57・67図)

H-12・13グリッドに位置し、平場の造成に際し削平されている。径が0.95～1.06mのほぼ円形で、深さが0.48mである。

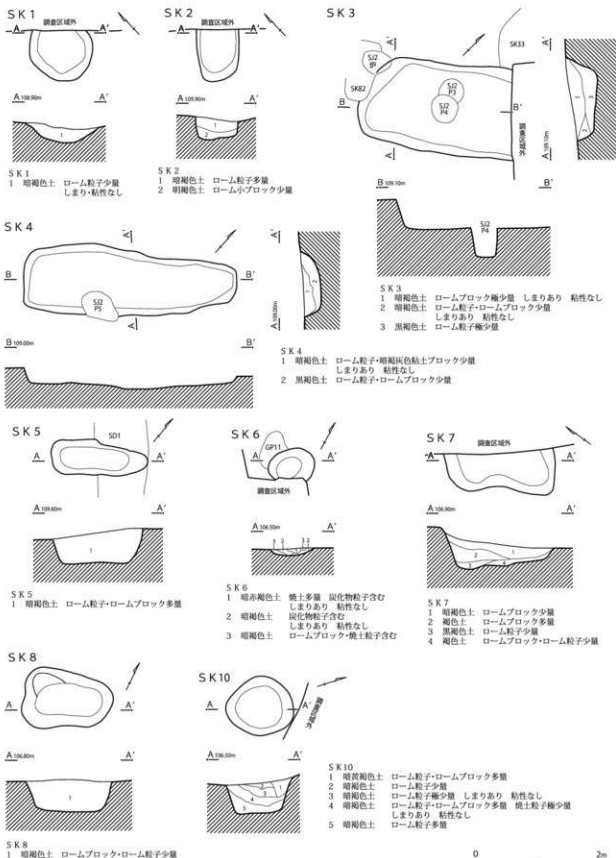
土質はしまりに富んだ黒褐色や暗褐色土で、縄文時代の可能性がある。現存部での径が0.80m、深さが0.50mである。遺物は第67図37・38が出土した。

第11号土壌 (第58図)

G-12グリッドに位置し、調査区南壁に接して検出された。残存部分から円形の土壌と思われる。ほぼ垂直に掘り込まれていた。遺物は出土しなかったが、埋土から縄文時代の所産と判断した。

第12・82号土壌 (第58・67図)

G-11グリッドに位置し、第2号住居跡を壊して構築されており、第82号土壌と重複関係にあ



第57図 土壌 (1)

る。長径1.34m、短径0.98mの長方形で、深さは0.56mである。中近世の所産と考えられるが、埋土には第2号住居跡に関連すると思われる縄文土器が含まれていた。土器には新旧の破片が含まれているが、第1号住居跡には連弧文系土器が含まれていないことや、第2号住居跡には、縄文地文の加曽利E式が含まれていたことなどから、第1号住居を壊して構築された、第2号住居跡に関連する遺物とみてよいであろう。

第67図39～51が、第12号土壌の埋土に含まれていた縄文土器である。39は燃系Lを地文とする口縁部破片である。40・41は、燃系Lの地文上に、隆帯により口縁部文様が描かれている。44～47は、燃系Lの地文上に、隆帯による懸垂文を持つ胴部破片、51は同種の底部破片である。47には隆帯上に刻みが施され、第66図25の、第4号土壌出土土器と同一個体であろう。42はRL縄文地文の口縁部破片である。48・49は連弧文系土器と思われる。

第13号土壌 (第58・67図)

G-11グリッドに位置し、第1号住居跡と第2号住居跡を壊して構築され、東壁の一部は、第24号土壌に壊されていた。長径1.30m、短径0.58mの長方形で、深さは0.56mである。中近世の所産だが、住居跡を壊していたため、埋土には少量の縄文土器が混入していた。

第67図52～56が、第13号土壌の埋土から出土した縄文土器である。いずれも燃系を地文とする加曽利E式の口縁部と胴部破片である。

第14・16号土壌 (第58・67図)

G-12グリッドに位置する。第16号土壌は、長径3.13m、短径0.70mの長方形で、最深部で0.18mである。

第14号土壌は、第16号土壌の壁を壊して構築されていた。径が0.62～0.72mの楕円形で、深さは0.17mである。

いずれも中近世と判断されるが、第16号土壌が

ら、第67図66が出土した。66はRL縄文地文の底部破片で、隆帯による懸垂文を持ち、隆帯側には沈線が施文されている。

第15号土壌 (第58・67図)

G-11・12グリッドに位置し、第2号溝跡と接している。長径3.00m、短径0.86mの長方形で、深さは0.18mである。第2号住居跡の東端部を壊していたため、埋土には縄文土器が混入していた。

第67図57～65が、第15号土壌から出土した土器である。58・59は勝坂式で、58は隆帯側に竹管文が施されている。57・60・62～64は加曽利E式土器で、燃系地文上に隆帯による懸垂文をもつ胴部破片である。57の隆帯上には、押圧が施されている。61は連弧文系土器である。64はRL縄文地文のみの深鉢で、時期は判然としない。65は無文の口頸部破片である。

第17号土壌 (第58図)

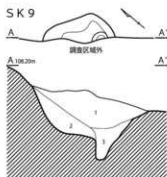
G-12グリッドに位置し、北壁が第2号溝跡に、南壁が第16号土壌に壊されていた。長径2.08m、短径0.75mの長方形で、底面には不整形の一段深い掘り込みが認められた。中近世の所産と考えられる。

第18号土壌 (第58・67・68図)

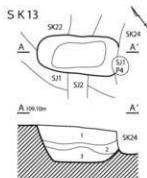
F-11グリッドに位置し、調査区南壁に接して検出された。径が1.26～1.33mの円形で、検出面からの深さが0.24mで、壁は垂直に立ち上がる。

埋土は暗褐色土が基調で、しまりに富んだ土質であることや、縄文土器や石器が出土したことから、縄文時代の所産と判断した。

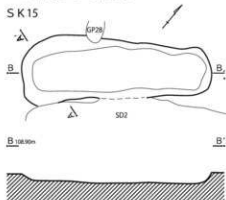
第67図67～第68図73が、第18号土壌出土遺物である。68・69は同一個体と思われる。頸部に無文帯を持ち、胴部は燃系Lの地文上に隆帯による懸垂文を持つ深鉢形土器である。直線的に垂下する懸垂文は、胴中位で渦巻状の文様を描くものと考えられる。70はRL縄文地文上に、沈線による懸垂文が描かれている。71は燃系地文の胴部破片である。



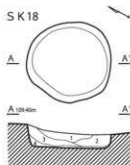
- SK 9
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量
 - 2 暗褐色土 ローム粒子多量
 - 3 暗褐色土 ローム粒子極少量



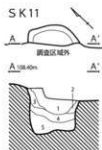
- SK 13
- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量
 - 2 暗褐色土 ローム粒子多量
 - 3 暗褐色土 ローム粒子含む



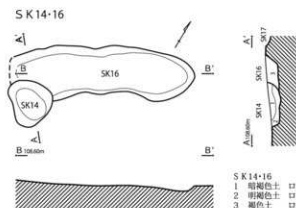
- SK 15
- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量 しまりあり
 - 2 暗褐色土 ローム粒子多量 しまりあり



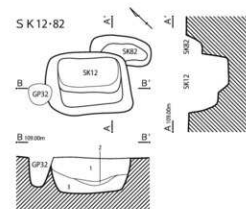
- SK 18
- 1 暗褐色土 ローム粒子含む
 - 2 暗褐色土 ローム粒子少量
 - 3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
 - 4 暗褐色土 しまりあり



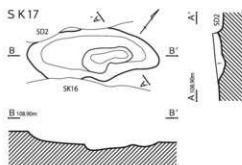
- SK 11
- 1 黒褐色土 ローム粒子極少量 しまりあり
 - 2 暗褐色土 しまりあり
 - 3 暗褐色土 ローム粒子少量 しまり・粘性なし
 - 4 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック少量
 - 5 黒褐色土 ローム粒子極少量 しまりあり



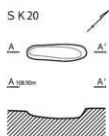
- SK 14・16
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量
 - 2 暗褐色土 ローム小ブロック多量
 - 3 暗褐色土 ローム粒子少量



- SK 12
- 1 暗褐色土 ローム粒子多量
 - 2 暗褐色土 ロームブロック含む
 - 3 暗褐色土 ローム粒子少量



- SK 17
- 1 暗褐色土 ローム粒子多量 しまりあり 粘性なし



0 2m

SK19



A 100.10m A'



SK19

1 暗褐色土

2 暗褐色土

3 暗茶褐色土

4 暗黄褐色土

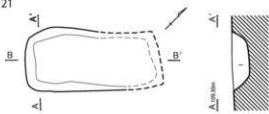
ローム粒子少量

ロームブロック含む

しまりあり 粘性なし

ローム粒子・ロームブロック多量

SK21



B 100.30m B'



SK21

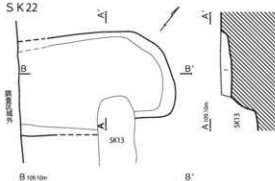
1 暗褐色土

ローム粒子極少量

ロームブロック少量

しまりあり 粘性なし

SK22



B 100.10m B'



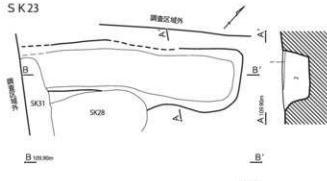
SK22

1 暗褐色土

ローム粒子・ロームブロック少量

しまりあり 粘性なし

SK23



B 100.30m B'



SK23

1 暗褐色土

ローム粒子極少量

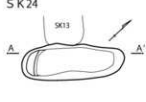
しまりあり 粘性なし

2 暗褐色土

ローム粒子含む

しまりあり 粘性なし

SK24



A 100.10m A'



SK24

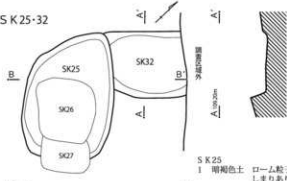
1 暗褐色土

ローム粒子極少量

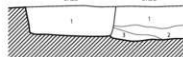
ロームブロック少量

しまりあり 粘性なし

SK25-32



B 100.20m B'



SK25

1 暗褐色土

ローム粒子少量

しまりあり 粘性なし

SK32

1 暗褐色土

ローム粒子少量

2 暗褐色土

ローム粒子・ロームブロック少量

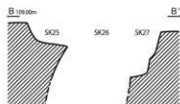
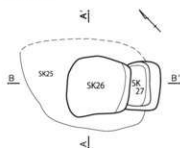
3 暗黄褐色土

ロームブロック多量

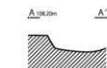
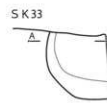
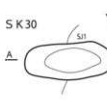
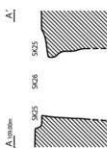
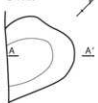
0 2m

第59図 土壌 (3)

S K 26・27

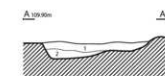
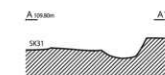
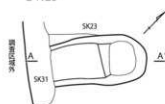


S K 29



第60図 土壇 (4)

S K 28



- S K 31
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック極少量
2 暗褐色土 ロームブロック少量 しまりあり



72は短冊形の打製石斧で、刃部を欠損している。
73は表面が破打後に研磨されていることから、石
棒の破片と考えられる。

第19号土壇 (第59・68図)

F-11グリッドに位置し、調査区南壁に接して
検出された。大半が調査区域外に延びるため、全
容が不明だが、長方形の土壇と考えられる。

現存部での短径が0.64m、深さが0.92mである。
形状等から、中近世の所産と考えられるが、埋土

には第68図74の刃部が欠損した打製石斧が含まれ
ていた。

第20号土壇 (第58図)

G-11・12グリッドに位置し、第4号土壇と
第15号土壇に挟まれた小型の土壇である。長径
0.94m、短径0.37m、深さ0.13mである。

第21号土壇 (第59図)

F-11グリッドに位置し、第1号住居の調査中
に、床面で検出した。第1号住居の床や柱穴P

2、跡を壊しており、第22号土壌とも重複していた。長径2.14m、短径1.02mの長方形で、深さは0.28mである。遺物は出土しなかったが、形状から、中近世の所産と判断した。

第22号土壌 (第59・68図)

F・G-11グリッドに位置する。第1・2号住居跡や第21号土壌を壊して構築されていた。東壁は第13号土壌に壊されていたほか、第2号住居跡の壁溝と重複していたため、立ち上がりが一部不明瞭であった。土壌の南側が調査区外に延びるが、現存部は、長径2.44m、短径1.53mで、長方形の土壌である。深さは0.18mと浅い。形状から中近世の所産と判断したが、住居跡を壊していたため、埋土には縄文土器が混入していた。

第68図75～78が出土土器である。いずれも燃糸地文の加曽利E式深鉢形土器破片である。

第23号土壌 (第59図)

F-10グリッドに位置し、土塁の盛り土下から検出された。調査区域外に延びることや、第31・28号土壌に壊されていたため、全容は不明だが、現存部は長径3.16m、短径1.00mの長方形で、深さは0.44mである。遺物が出土しなかったため、時期決定しがたいが、土塁下に構築されていたことから、中世の可能性がある。

第24号土壌 (第59・68図)

G-11グリッドに位置し、第2号住居跡と第13号土壌を壊して構築されていた。長径1.61m、短径0.55m、深さ0.46mである。埋土からは、第2号住居跡に関連すると思われる遺物が出土した。

第68図79～81が出土遺物である。81は撿形の打製石斧で、刃部が欠損している。

第25・32号土壌 (第59・68図)

F・G-11グリッドに位置し、第1・2号住居跡を壊して構築されていた。住居跡の調査に際して確認され、土層観察から、第25号土壌は第32号土壌を壊していることが明らかとなった。

第32号土壌は、調査区域外に延びるため全容が

不明だが、短径1.05mで、長方形と推定され、検出面からの深さは0.55mである。

第32号土壌の埋没後に第25号土壌が構築された。長径約2.00m、短径約1.40mで、検出面からの深さが0.47mである。第25号土壌は人為的に埋め戻されたと考えられ、その後に第26・27号土壌が構築された。

土壌はいずれも中・近世の所産と考えられるが、住居跡と重複していたため、第25号土壌の埋土から、縄文土器が混入していた。

第68図86～90が出土土器で、いずれも加曽利E式土器である。

第26・27号土壌 (第60・68図)

F・G-11グリッドに位置し、第25号土壌を壊して構築されていた。第26号土壌は、開口部の径が0.90～1.00mのほぼ方形である。底面まで検出できなかったため、深さや詳細が不明だが、地下式坑の可能性がある。第27号土壌の現存部は、径が0.90mで方形と思われ、深さは0.70mである。両者の前後関係は明らかにできなかったが、中近世と考えられる。第26号土壌には、第68図82・83の曽利式土器が混入していた。

第28号土壌 (第60図)

F-10グリッドに位置する。長軸方向が調査区外に延びている。現存部の短径は0.76mである。南東壁寄りが一段深く掘り込まれており、最深度で0.19mである。土塁下から検出されたことから、中世の可能性がある。

第29号土壌 (第60・68図)

H-13グリッドに位置する。不整形だが、埋土から縄文時代の可能性がある。第68図84・85が出土した。

第30号土壌 (第60図)

F-11グリッドに位置する。長径1.41m、短径は0.58m、深さ0.48mである。第1号住居跡を壊しており、東壁の立ち上がりが判然としなかった。遺物は出土しなかった。

第31号土壌 (第60図)

F-10グリッドに位置する。長軸方向が調査区域外に延びるため、全容は不明である。土層下から検出され、第23・28号土壌と重複している。遺物は出土しなかったが、中世に属するものであろう。

現存部の径は1.70m、深さ0.20mである。

第33号土壌 (第60図)

F-10グリッドに位置する。第1号住居跡の詳細を明らかにするため、調査区北壁を拡張した際に発見された。遺構は調査区域外に延びるため、全容は不明であるが、第1号住居跡を壊して構築されていた。遺物は出土しなかったが、中近世の所産であろう。

第34号土壌 (第61・68図)

C-6グリッドに位置する。長径1.48m、短径0.95mの長方形で、深さが0.12mである。中近世の所産と考えられるが、埋土には縄文土器が混入していた。

第68図91～93が出土土器である。91は条線地に沈線による懸垂文が施文されている。93は隆帯で区画された口縁部破片で、隆帯側と隆帯上に沈線が施されている。

第35号土壌 (第61・68図)

C-6グリッドに位置する。長径2.12m、短径1.30mの長方形で、検出面からの深さが0.18mである。形態や埋土から中近世の所産と考えられるが、埋土には、第68図94・95が混入していた。

94は条線を地文とし、隆帯で口縁部文様帯が区画されている。95は、隆帯と沈線で、渦巻文と方形区画文が構成された口縁部破片で、地文は縄文RLである。

第36号土壌 (第61図)

B・C-6グリッドで検出された。長径1.04m、短径0.83mの楕円形で、検出面からの深さは0.67mである。下層に黒色土が堆積していたことから、自然埋没が進んだ後に、人為的に埋め戻

されたものと考えられる。遺物は出土しなかったが、中近世の所産であろう。

第37号土壌 (第61図)

C-6・7グリッドで検出された。長径1.42m、短径0.78mの長方形で、検出面の深さは0.31mである。埋土の状況から、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかったが、中近世の所産であろう。

第38号土壌 (第61図)

C-8グリッドで検出された。径が1.42～1.46mのほぼ円形で、深さは0.26mである。埋土は黒褐色土や暗褐色土で、下層から中層にかけて、礫が出土した。また、埋土には炭化物や焼土粒子が含まれていたことから、縄文時代の所産と判断した。土器が出土しなかったため、時期は決め難いが、中期の集石土壌の可能性も考えられる。

第39号土壌 (第61図)

C・D-8グリッドに位置する。径が0.90m前後のほぼ円形で、検出面からの深さが0.26mである。遺物は出土しなかった。

第40号土壌 (第61・69図)

C-7グリッドに位置する。開口部が不正楕円形で、内部が長方形で、長径1.35m、短径1.15m、深さ0.48mである。底面中央部に深さ0.48mのビットを持つ土壌である。中近世の所産と思われるが、埋土内には第69図112のスクレイパーが混入していた。

第42号土壌 (第62・69図)

D-7グリッドに位置する。南西壁側が浅く、南東壁側では長径1.30m、短径1.00m、深さ0.60mの長方形の掘り込みがある。これに接した南西側は、開口部が台形に掘り込まれており、底面まで完掘することができなかった。形状からみて、地下式抗あるいは近世以降のムロと考えられ、天井部が崩落したものであろう。埋土に少量の縄文土器が混入していた。

第69図108は、縦の沈線文間に交互に沈線が施文される土器で、勝坂式終末期の深鉢形土器である。

第43号土壙 (第61図)

D-7・8グリッドに位置する。径が0.50m前後の方形で、深さが0.18mである。遺物は出土しなかった。

第45号土壙 (第61図)

D-7グリッドに位置し、第43号土壙に近接している。長径0.58m、短径0.46mで、深さが0.14mである。遺物は出土しなかった。

第46号土壙 (第62・68・69図)

D-8グリッドに位置する。長径が1.18m、短径1.00mの楕円形で、深さが0.72mである。埋土は自然堆積で、縄文土器が比較的まとまって出土していることから、縄文時代の所産と考えられる。

第68図96～第69図107が出土土器である。96は結節浮線文が施文された十三菩提式土器で、今回報告する中で、唯一の資料である。

97・98は燃系地文、99は縄文地文の加曽利E式口縁部破片である。102は条線を地文とする連孤文系土器、103・104は曽利系土器で、103には区画内に横走る沈線が充填されている。104は底部破片で、懸垂文間に刺突が充填されている。

105～107は胴部破片で、105・107は条線地文、106は無文である。

第44・48号土壙 (第61・69図)

D-8グリッドに位置し、第48号土壙は第44号土壙を壊して構築されていた。

第44号土壙は、径が1.00～1.07mの方形で、検出面からの深さが0.61mで、底面が楕円形である。

第48号土壙は、長径0.92m、短径0.62mの長方形で、検出面からの深さが0.19mである。

形状などから、いずれも中近世の所産と考えられるが、第48号土壙の埋土には、縄文土器が混入していた。

第69図109～111が出土土器である。109は燃系地文の口縁部、110は縄文地文の口縁部である。111は連孤文系土器であろう。

第49号土壙 (第62・69図)

C-7グリッドで検出された。長径2.34m、短径1.28mの楕円形で、壁はオーバーハング気味に立ちあがっており、検出面からの深さが1.65mである。中近世の所産と想定されるが、埋土には縄文土器が混入していた。

第69図113～121が出土土器である。113は内湾気味に開く口縁部破片で、口唇直下に隆帯が廻り、地文は燃系である。114は口縁部破片で、隆帯により区画文が描かれる。115・116は、RL縄文地上に懸垂文が施文される土器で、115は半截竹管内面の重複施文、116は隆帯による懸垂文である。

117は連孤文系、118～121は曽利系の土器である。118は外面と内面の肥厚部に縦の沈線が描かれている。121は、沈線間に密な交互の刺突が施されている。

第50号土壙 (第62図)

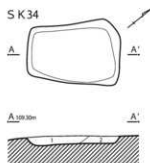
C-7グリッドで検出された。長径1.13m、短径0.50mの小型長方形の土壙で、検出面からの深さは0.34mである。遺物は出土しなかったが、形状から中近世の所産であろう。

第51号土壙 (第62図)

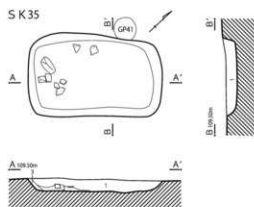
C-7グリッドで検出された。第50号土壙に隣接する土壙で、2基が重複していた可能性がある。長径1.30m、短径0.92mで、底面にはピットが掘り込まれていた。遺物は出土しなかった。

第53号土壙 (第62図)

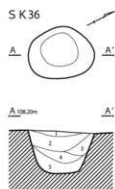
D・E-8グリッドに位置し、調査区の南壁際で検出された。長径1.41m、短径0.83mの楕円形で、検出面からの深さは1.02mである。埋土の4～7層にはロームブロックが多量に含まれることから、中途まで人為的に埋め戻された可能性がある。遺物は出土しなかったが、中近世の所産であ



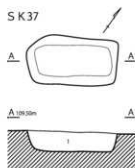
- S K 34
1 暗褐色土 ロームブロック含む
2 黒褐色土 ローム粒子少量



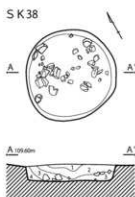
- S K 35
1 暗褐色土 ロームブロック多量
2 黒褐色土 ローム粒子少量
3 黒褐色土 ロームブロック含む



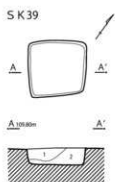
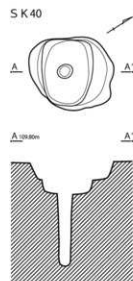
- S K 36
1 褐色土 ローム粒子多量
2 暗褐色土 ローム粒子多量
3 黄褐色土 ロームブロック少量
4 黄褐色土 ローム粒子多量
5 黒色土 ローム粒子少量
しまりあり



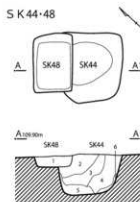
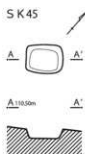
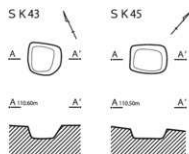
- S K 37
1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量



- S K 38
1 暗褐色土 ローム粒子多量
砂礫・炭化物粒子・焼土粒子少量
白色粒子微量 しまり強
2 暗褐色土 ローム粒子多量
焼土粒子・炭化物粒子・白色粒子微量
しまり強
3 黒褐色土 ローム粒子多量
焼土粒子・炭化物粒子少量 しまり強
4 黒褐色土 ローム粒子含む



- S K 39
1 黒色土 ロームブロック・ローム粒子多量
2 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量

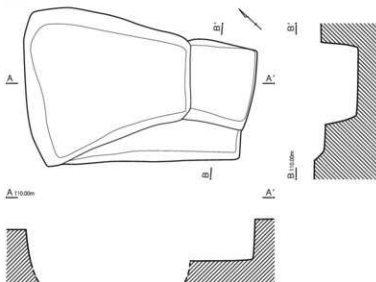


- S K 44・48
1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量
焼土粒子・炭化物粒子微量
2 暗褐色土 ローム粒子多量
ロームブロック・炭化物粒子・焼土粒子微量
しまり強
3 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物粒子・焼土粒子微量
4 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子含む
炭化物粒子微量 しまり強
5 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
6 黄褐色土

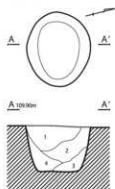
0 2m 1m

第61図 土壌 (5)

SK 42



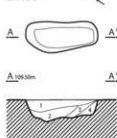
SK 46



SK 46

- 1 黒褐色土 ローム粒子・砂礫多量 焼土粒子・炭化物粒子少量
2 黒褐色土 砂礫多量 ロームブロック・炭化物少量
3 黄褐色土 ロームブロック多量
4 褐色土 ロームブロック多量 ローム粒子少量

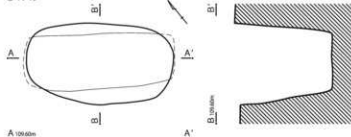
SK 50



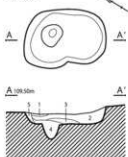
SK 50

- 1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量
2 黒褐色土 焼土粒子少量
3 黒褐色土 ローム粒子少量
4 暗褐色土 ローム粒子少量

SK 49



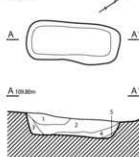
SK 51



SK 51

- 1 黒褐色土 ローム粒子多量
2 褐色土 ロームブロック含む
3 暗褐色土 ローム粒子多量
4 暗褐色土 炭化物少量
5 黄褐色土 ローム粒子少量
6 黄褐色土 ロームブロック含む

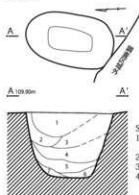
SK 55



SK 55

- 1 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
2 暗褐色土 ローム粒子多量
3 黒褐色土 ローム粒子多量
4 黄褐色土 ローム粒子多量
5 褐色土 ロームブロック少量
6 黄褐色土 ロームブロック含む

SK 53



SK 53

- 1 黒褐色土 ローム粒子多量
2 黒褐色土 炭化物粒子少量
3 黄褐色土 ローム粒子多量
4 暗褐色土 ロームブロック多量
5 褐色土 ロームブロック多量
6 黄褐色土 ロームブロック多量
7 黄褐色土 ロームブロック主体

0 2m 100

第62図 土坑 (6)

ろう。

第55号土壙 (第62・69図)

C-7グリッドで検出された。長径1.48m、短径0.64mの長方形で、検出面からの深さは0.44mである。中近世の所産と思われるが、埋土には縄文土器が混入していた。

第69図122・123が出土土器である。122は条線地文、123は燃系地文の連弧文系土器であろう。

第56号土壙 (第63・69図)

D-6グリッドに位置し、第5号住居跡に近接して検出された。径が1.30m前後の円形で、検出面からの深さが0.49mである。埋土から縄文土器が出土していることや、土質等から、縄文時代の所産と考えられる。

第69図124～129が出土土器である。124の勝坂式のキャリバー形土器は、文様帯が隆帯によって区画され、文様帯内には、沈線や印刻手法によって曲線的な文様が描かれると共に、空白部には、密な刻みや刺突が充填されている。

125～127は加曾利E式土器で、125の口縁部には、撚り糸地文を有する。126は頸部無文帯、127は胴上半部で、縄文地文上に沈線による蛇行懸垂文が施文されている。128・129は無文の鉢形土器であろうか。

第57・58号土壙 (第63・69・70図)

C・D-6グリッドに位置し、第4号住居跡に近接して検出された。重複関係にあり、第58号土壙を壊して、第57号土壙が構築されていた。

第57号土壙は、径が0.82～0.97mの楕円形ないしは長方形で、底面は一段深く掘り込まれ、検出面からの深さは、最深部で0.55mである。

第58号土壙は、径が0.95～1.08mの楕円形で、検出面からの深さは0.66mである。

土壙からは、縄文土器や石器が少量出土している。土質とも併せて、いずれの土壙も縄文時代の所産と判断した。

第69図130・133～第70図134が出土遺物である。

130は第57号土壙出土土器で、燃系地文上に、隆帯の懸垂文が垂下している。133・134は第58号土壙出土遺物で、133は立体感のある隆帯で区画され、区画内に渦巻状の沈線文が施文された口縁部破片である。134は小型の磨製石斧で、表裏面とも丁寧に研磨されている。

第59号土壙 (第63図)

D-7グリッドに位置し、第3号住居跡の柱穴P3を壊して構築されていた。径が0.56～0.69mの楕円形で、深さは0.32mである。遺物は出土しなかった。

第60号土壙 (第63図)

D-7グリッドに位置し、第3号住居跡に近接していた。長径1.12m、短径0.95mの楕円形で、底面には径が0.40mのビット状の掘り込みが認められた。検出面からの深さは、土壙底面までが0.16m、ビットの最深部までが0.56mである。遺物は出土しなかったが、中近世の所産であろう。

第61号土壙 (第63図)

D-6グリッドに位置し、調査区南壁に接して検出された。長径1.28m、短径0.52mの長方形で、検出面からの深さが0.39mである。南東壁はビット状に掘り込まれており、深さが0.46mである。中近世の所産と思われるが、遺物は出土しなかった。

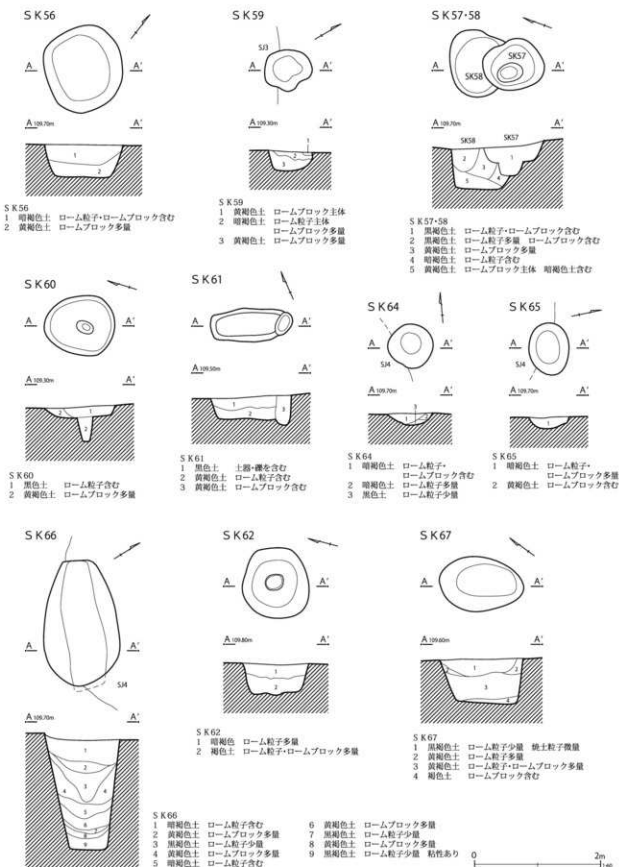
第62号土壙 (第63・70図)

C-7グリッドに位置する。径が1.08～1.19mの楕円形で、検出面からの深さが0.48mである。埋土からは縄文土器や石器が出土しており、土質などから縄文時代の所産と判断した。

第70図151・152が出土遺物である。151は強く外反する深鉢形土器の口縁無文部で、曾利系土器と考えられる。152は石皿破片で、表裏面にはともに窪みを有している。

第64号土壙 (第63・70図)

C-7グリッドに位置し、第4号住居跡の壁溝を壊して構築されていた。径が0.70m前後、検



第63図 土坑 (7)

出面からの深さは0.12mと浅い。遺物は出土しなかったが、中近世の所産であろう。

第65号土壌 (第63図)

C-7グリッドに位置し、第64号土壌と同様に、第4号住居跡の壁溝を壊して構築されていた。長径0.83m、短径0.64m、検出面からの深さは0.18mである。遺物は出土しなかったが、中近世の所産であろう。

第66号土壌 (第63・70図)

C・D-6・7グリッドに位置し、第4号住居跡の壁を壊して構築されていた。長径1.97m、短径1.18mの長楕円形で、検出面からの深さは1.72mである。底面は平坦で、壁は短軸側では垂直かややオーバーハング気味に立ちあがっていた。

埋土は黄褐色土と黒ないしは暗褐色土が互層をなしており、人為的に埋め戻された可能性が高い。埋土には縄文土器が含まれていたが、恐らく中近世の所産であろう。

第70図135～149が出土土器である。135～140は加曾利E式土器で、138は口唇部が強く外反し、口縁部が直立気味であることから、鉢形土器の可能性が考えられる。口縁部は隆帯によって区画され、区画内部には、端部が渦巻状となる沈線文が施文されている。地文は縄文RLである。141～144は連弧文系土器で、撚糸地文である。145～147は曾利系土器で、条線地に隆帯や沈線による懸垂文や曲線的な文様が配されている。149は無文の口頸部で、内面が肥厚する曾利系土器であろう。

第67号土壌 (第63・69図)

C-7・8グリッドに位置する。長径1.34m、短径0.86mの楕円形で、検出面からの深さは0.7mである。縄文時代の所産と考えられるが、第1層を除き埋め戻されたような堆積状況であった。

第69図131・132が出土土器である。いずれも無文で、時期が不明瞭である。

第68・69号土壌 (第64図)

B・C-6グリッドに位置し、調査区の西端で

検出された土壌である。第68号土壌は、第69号土壌に壊されており、両土壌は第3号溝跡に壊されていた。

第68号土壌は、短径0.9m、推定長径1.20m前後の楕円形で、深さは0.12mである。第69号土壌は、径が0.70m前後の楕円形で、深さが0.11mである。遺物は出土しなかったが、いずれも中近世の所産と考えられる。

第70号土壌 (第64・71図)

C-7グリッドに位置し、第6号住居跡を壊して構築されていた。長径1.52m、短径0.51mの長方形である。第6号住居跡の床面よりもやや深く、検出面からの深さは0.60mである。中近世の所産と考えられるが、埋土から第6号住居跡のものと想定される石器が出土した。

第71図157・158が出土土器である。157は尖頭器である。上下が欠損するため、全体の形状は不明である。一次剥離面を大きく残し、主に片側から調整されている。

158はスクレイパーである。一部欠損するが、剥片の縁道を一周するように調整し、刃部として利用されている。

第71号土壌 (第64・71図)

D-8グリッドに位置する。径が0.91～0.96mのほぼ円形の土壌で、検出面からの深さは0.43mである。埋土から縄文土器が出土しており、土質や形状から、縄文時代の所産と判断した。

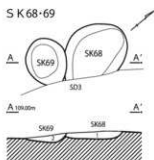
第71図159が出土土器である。条線地文上に隆帯による懸垂文をもち、底部直上にはヘラナデが施されている。

第72号土壌 (第64・70図)

D-8グリッドに位置し、第71号土壌に隣接している。長径が0.54m、短径0.48mの長方形に近く、検出面からの深さは0.2mである。出土遺物から、縄文時代と考えられる。

第73号土壌 (第64・70図)

D-8グリッドに位置する。径が0.95～1.02m



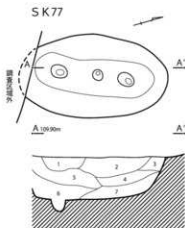
SK 68-69

- 1 暗褐色土 焼土粒子少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子含む



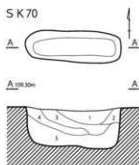
SK 72

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量
- 2 褐色土 暗褐色土少量 しまり強



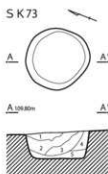
SK 77

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物粒子少量 しまり強
- 2 暗褐色土
- 3 褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量 暗褐色土少量 しまり強
- 4 褐色土
- 5 黒褐色土 ローム粒子多量
- 6 黒褐色土 ローム粒子多量 褐色土少量 しまり強
- 7 黒褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック・褐色土少量 しまり強
- 8 黒褐色土 ローム粒子の洩れで分離



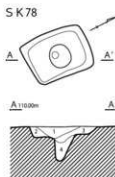
SK 70

- 1 暗褐色土 ローム粒子含む
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック含む
- 3 黒褐色土 ローム粒子少量 焼土粒子含む
- 4 暗褐色土 ロームブロック多量
- 5 黄褐色土 ローム粒子多量



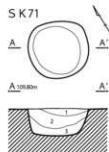
SK 73

- 1 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量 しまり強
- 2 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子多量
- 3 黒褐色土 ロームブロック少量 しまり強
- 4 黄褐色土 ローム粒子多量 炭化物粒子少量 しまり強
- 5 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量 しまり強



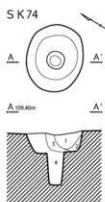
SK 78

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子・炭化物粒子・白色粒子少量 しまり強
- 2 暗褐色土 黄褐色土、焼土粒子、白色粒子少量 しまり強
- 3 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子・白色粒子少量 しまり強
- 4 褐色土 暗褐色土・炭化物粒子少量 しまり強



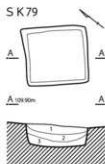
SK 71

- 1 黄褐色土 ローム粒子多量 しまり強
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量 炭化物粒子少量 しまり強
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量 しまり強



SK 74

- 1 褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック・白色粒子少量 しまり強
- 2 褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック・白色粒子・暗褐色土少量 しまり強
- 3 褐色土 ローム粒子多量 白色粒子少量 しまり強
- 4 黄褐色土 炭化物粒子・焼土粒子微量 しまり強

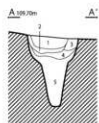


SK 79

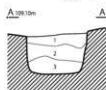
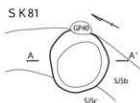
- 1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物粒子少量
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量 炭化物粒子少量
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量



第64図 土壌 (8)



- SK80
- 1 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子・白色粒子多量
 - 2 黒褐色土 ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子多量
 - 3 黒褐色土 ローム粒子多量
 - 4 褐色土 ロームブロック多量
 - 5 黒褐色土 ローム粒子少量



- SK81
- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子微量
 - 2 暗褐色土 焼土ブロック多量
 - 3 黄褐色土 ロームブロック多量



第65図 土坑 (9)

のほぼ円形で、検出面からの深さが0.42mである。

埋土は壁際に、崩落土と考えられるロームを主体とした土層が堆積し、その後にロームや焼土・炭化物を含む土層が堆積していた。埋土出土土器から、縄文時代の所産であろう。

第70図153～156が出土土器である。153・154は、連弧文系土器と考えられ、153は条線地文、154は撚り糸地文である。155は条線地文上に2条の隆帯が貼付された曽利式土器であろう。156は無文の口縁部破片で、曽利式土器であろう。

第74号土坑 (第64図)

D-9グリッドに位置する。長径1.07m、短径0.90mの楕円形で、床面までの深さが0.66mである。床面にはビット状の掘り込みが検出された。径が0.30m前後、床面からの深さが0.50mである。

第77号土坑 (第64図)

E-9グリッドに位置し、土坑の南端が調査区域外に延びている。短径1.32m、推定長径2.35mの楕円形である。壁は急傾斜で掘り込まれ、平坦な底面には、3基の小ビットが検出された。検出面からの床面までの深さは0.66m、小ビットの深さは0.20m程度である。埋土は自然堆積である。

土坑の形状から、縄文時代の落とし穴と考えら

れる。

第78号土坑 (第64図)

D-9グリッドに位置し、第4号溝に近接している。長径1.01m、短径0.68mの長方形で、床面中央部に小ビットを持つ。床面までの深さは0.17m、ビットの深さは0.37mである。中近世の所産であろう。

第79号土坑 (第64図)

E-9グリッドに位置する。1辺が1m前後の方形で、検出面からの深さが0.34mである。中近世の所産であろう。

第80号土坑 (第65図)

E-9・10グリッドに位置する。長径0.98m、短径0.81mの長方形で、床面中央部に小ビットを持つ。床面までの深さは0.42m、小ビットの深さは0.66mである。中近世の所産であろう。

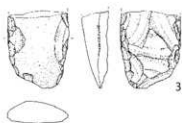
第81号土坑 (第65図)

C-6グリッドに位置し、第5号住居跡を壊して構築され、壁の一部が小ビットに壊されていた。径が0.92～0.98mのほぼ円形で、検出面からの深さは0.63mである。遺物は出土しなかったが、中近世の所産であろう。

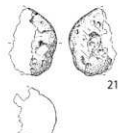
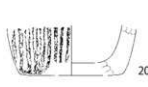
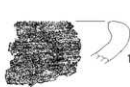
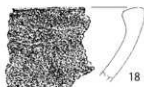
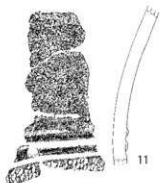
SK 1



SK 2



SK 3

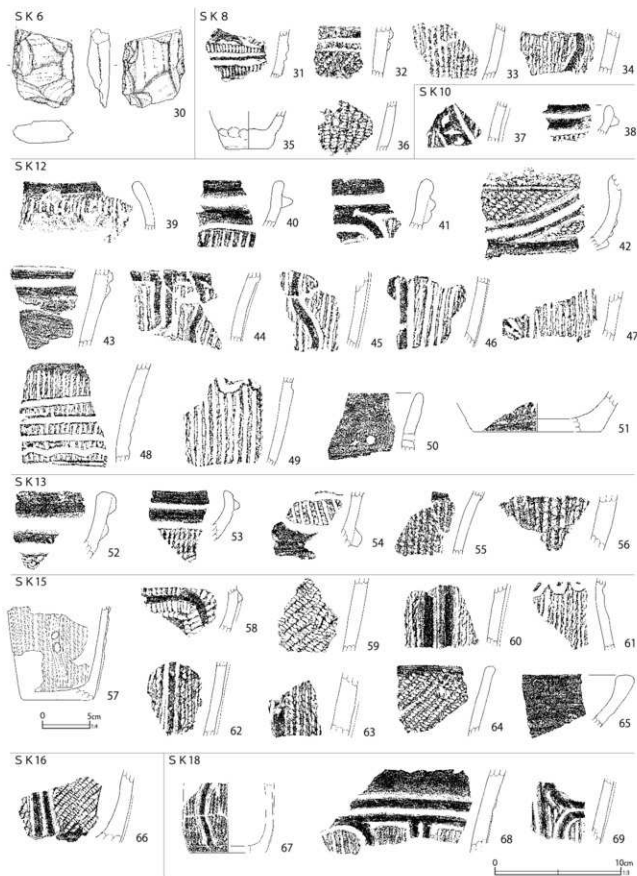


SK 4



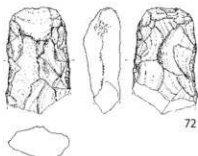
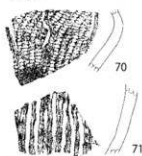
0 10cm

第66図 土壙出土遺物(1)

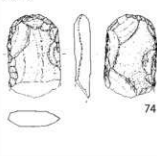


第67図 土壇出土遺物 (2)

SK18



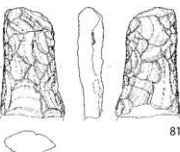
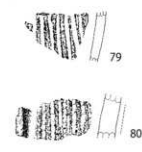
SK19



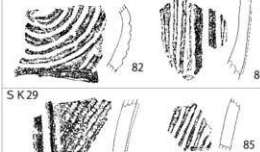
SK22



SK24



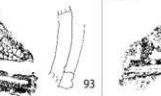
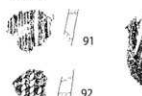
SK26



SK25



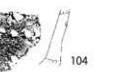
SK34



SK35



SK46



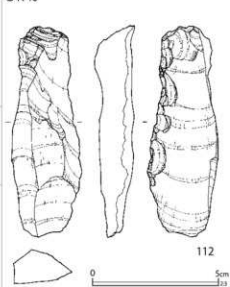
0 10cm

第68图 土壙出土遺物(3)

S K 46



S K 40



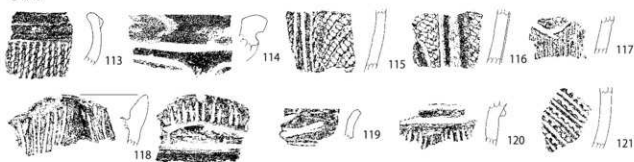
S K 42



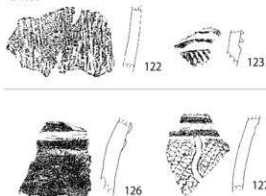
S K 48



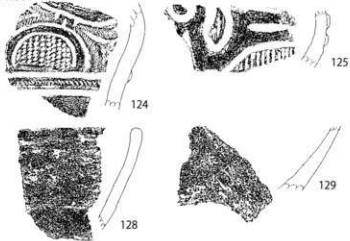
S K 49



S K 55



S K 56



S K 57



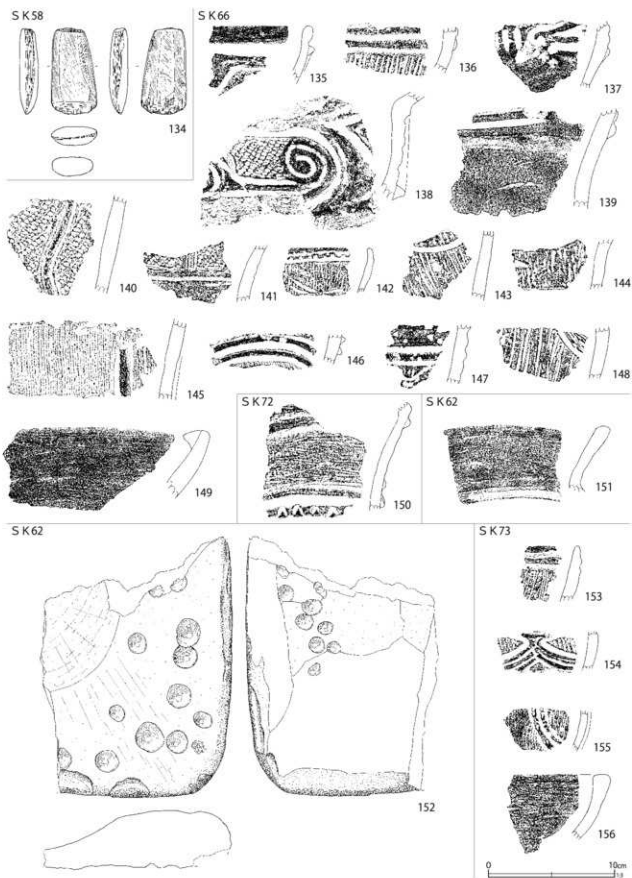
S K 67



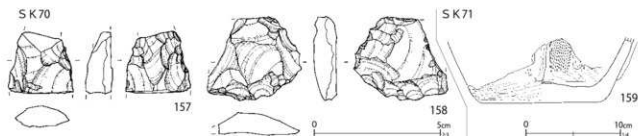
S K 58



第69図 土壇出土遺物 (4)



第70図 土壙出土遺物(5)



第71図 土坑出土遺物 (6)

第8表 土坑一覽表

遺構名	調査次	グリッド	平面形	長軸×短軸 (m)	深さ (m)	主軸方位	時代
SK-1	2	G-12	円形	1.03	0.22		縄文
SK-2	2	F-11		0.82 × 0.68	0.30	N-42°-E	
SK-3	2	G-11・12	長方形	2.44 × 1.45	0.40	N-45°-E	
SK-4	2	G-11・12	長方形	3.38 × 1.01	0.28	N-49°-E	
SK-5	2	F-11	楕円形	1.54 × 0.56	0.46	N-54°-E	
SK-6	2	H-12	円形	0.72 × 0.48	0.10	N-40°-E	
SK-7	2	G-12		1.74	0.34		
SK-8	2	G-12	不正楕円形	1.40 × 0.85	0.50	N-62°-E	
SK-9	2	G-12	円形	1.14	0.70		
SK-10	2	H-12・13	円形	1.06~0.95	0.48		縄文
SK-11	2	G-12	長方形	0.80	0.50		縄文
SK-12	2	G-11	長方形	1.34 × 0.98	0.56	N-43°-W	
SK-13	2	G-11	長方形	1.30 × 0.58	0.56	N-52°-W	
SK-14	2	G-12	楕円形	0.72 × 0.62	0.17	N-55°-W	
SK-15	2	G-11・12	長方形	3.00 × 0.86	0.20	N-48°-E	
SK-16	2	G-12	長方形	3.13 × 0.70	0.18	N-58°-E	
SK-17	2	G-12	楕円形	2.08 × 0.75	0.22	N-51°-E	
SK-18	2	F-11	円形	1.33 × 1.26	0.24		縄文
SK-19	2	F-11	楕円形	0.92 × 0.64	0.92	N-42°-E	
SK-20	2	G-11・12	楕円形	0.94 × 0.37	0.13	N-48°-E	
SK-21	2	F-11	長方形	2.14 × 1.02	0.28	N-45°-E	
SK-22	2	F・G-11	長方形	2.44 × 1.53	0.18	N-50°-E	
SK-23	2	F-10	長方形	3.16 × 1.00	0.44	N-47°-E	
SK-24	2	G-11	楕円形	1.61 × 0.55	0.46	N-45°-E	
SK-25	2	F・G-11	楕円形	2.02 × 1.42	0.47	N-43°-W	
SK-26	2	F・G-11	方形	1.00 × 0.92	0.86~	N-44°-W	
SK-27	2	F・G-11	円形	0.90 × 0.47	0.70	N-49°-E	
SK-28	2	F-10	長方形	1.52 × 0.76	0.19	N-45°-E	
SK-29	2	H-13		1.25 × 1.06	0.40	N-30°-E	
SK-30	2	F-11	楕円形	1.41 × 0.58	0.48	N-47°-W	
SK-31	2	F-10		1.70	0.22		
SK-32	2	F-11	長方形	1.39 × 1.05	0.55	N-42°-E	
SK-33	2	F-11		1.00 × 0.95	0.26		
SK-34	3	C-6	長方形	1.48 × 0.95	0.12	N-39°-E	
SK-35	3	C-6	長方形	2.12 × 1.30	0.18	N-40°-E	縄文
SK-36	3	B・C-6	楕円形	1.04 × 0.83	0.67	N-28°-E	
SK-37	3	C-6・7	長方形	1.42 × 0.78	0.31	N-53°-E	
SK-38	3	C-8	円形	1.46~1.42	0.26		縄文
SK-39	3	C・D-8	方形	0.92	0.26	N-57°-E	
SK-40	3	C-7	不整楕円形	1.32 × 1.16	0.50~1.64	N-32°-E	
SK-42	3	D-7	長方形	3.64 × 2.42	0.64	N-44°-W	縄文
SK-43	3	D-7・8	方形	0.54 × 0.50	0.18	N-63°-W	

遺構名	調査次	グリッド	平面形	長軸×短軸 (m)	深さ (m)	主軸方位	時代
SK-44	3		方形	1.07 × 1.01	0.61	N-45°-E	
SK-45	3	D-7	長方形	0.58 × 0.46	0.14	N-45°-E	
SK-46	3	D-8	楕円形	1.18 × 1.00	0.72	N-75°-W	縄文
SK-48	3	D-8	長方形	0.92 × 0.62	0.19	N-42°-W	
SK-49	3	C-7	楕円形	2.34 × 1.28	1.65	N-50°-W	
SK-50	3	C-7	長方形	1.13 × 0.50	0.34	N-33°-W	
SK-51	3	C-7	不整楕円形	1.30 × 0.92	0.16~0.40	N-34°-W	
SK-53	3	D・E-8	楕円形	1.41 × 0.83	1.02	N-14°-E	
SK-55	3	C-7	長方形	1.48 × 0.64	0.44	N-36°-E	
SK-56	3	D-6	円形	1.30 × 1.40	0.49		縄文
SK-57	3	C・D-6	楕円形	0.97 × 0.82	0.30~0.55	N-16°-W	縄文
SK-58	3	C-6	楕円形	1.08 × 0.95	0.66	N-50°-E	縄文
SK-59	3	D-7	楕円形	0.69 × 0.56	0.32	N-30°-E	
SK-60	3	D-7	楕円形	1.12 × 0.95	0.16~0.56	N-15°-W	
SK-61	3	D-6	長方形	1.28 × 0.52	0.39	N-66°-W	
SK-62	3	C-7	楕円形	1.19~1.08	0.48		縄文
SK-64	3	C-7	円形		0.70		
SK-65	3	C-7	楕円形	0.83 × 0.64	0.18	N-84°-W	
SK-66	3	C・D-6・7	長楕円形	1.97 × 1.18	1.72	N-59°-W	
SK-67	3	C-7・8	楕円形	1.34 × 0.86	0.70	N-33°-W	縄文
SK-68	3	B・C-6	楕円形	0.98 × 0.90	0.12	N-13°-W	
SK-69	3	C-6	楕円形	0.74~0.64	0.11		
SK-70	3	C-7	長方形	1.52 × 0.51	0.60	N-89°-W	
SK-71	3	D-8	円形	0.96~0.91	0.43		縄文
SK-72	3	D-8	方形	0.54 × 0.48	0.20	N-53°-E	縄文
SK-73	3	D-8	円形	1.02~0.95	0.42		縄文
SK-74	3	D-9	楕円形	1.07 × 0.90	0.32	N-59°-E	
SK-77	3	E-9	楕円形	2.15 × 1.32	0.66	N-20°-E	縄文
SK-78	3	D-9	長方形	1.01 × 0.68	0.17		
SK-79	3	E-9	方形	0.98~0.92	0.34		
SK-80	3	E-9・10	長方形	0.98 × 0.81	0.42	N-40°-E	
SK-81	3	C-6	円形	0.98~0.92	0.63		
SK-82	2	G-11	楕円形	0.96 × 0.46	0.24	N-32°-W	

時期に記入のない土壌は中・近世に属するものと推定

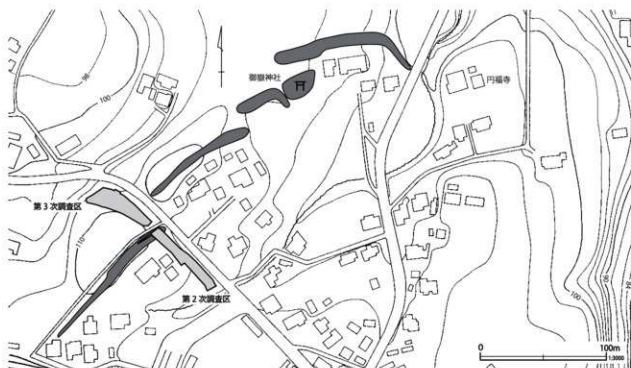
4. 土塁跡

西武池袋線高麗駅の北方から北東に延びる土塁が、第2次調査区と第3次調査区の境をなす市道に沿って所在していることから、今回その一部が調査の対象となった。

この土塁跡は、高麗川に向かって北東に大きく張り出した台地の尾根沿いに、断続的ながらも直線距離にして約300mと長く続いている（第72図）。調査区の北東約150mに位置する御獄神社付近には虎口や塁線に折れが見られ、土塁に伴う空堀の一部が現存する。『新編武蔵風土記稿』などの文献には、その記録はまったく記されていないが、地元では「岡城」あるいは「台城」と呼ばれ

ているほか、戦国時代の土豪、岡上隼人正秀信の居住した秀殿屋敷との伝承もある。周辺には大門坂・飯米場などの地名が見られることから、高麗川が大きく蛇行する巾着田に面した台地先端の円福寺付近に本丸をおく中世城館跡と推定されている（谷井1988）。しかし、残存する土塁にはほとんど防衛的な機能が見られず、城館跡とするには否定的な見解もある（関口1992）。

今回の調査では第1号土塁と呼称し、隣接地を含めた測量調査及び土塁の断ち割り調査を実施した。



第72図 土塁跡位置図

第1号土塁跡（第72・75図）

第1号土塁跡は、南西から市道に沿って直線的に延び、第2次調査区の北西端を横断し、国道の手前で止まっていた。現状では、国道を隔てた対岸の台地上に土塁が続いていないことから、調査区内で途切れてしまうのか、あるいは斜面に沿って谷部に向かって折れていたのかは明確にできなかった。ただし、対岸の台地上にも北へ20mほど移動して、土塁跡はさらに東へと続いており、一連のものであることを示している。

測量調査は隣接地を含め、長さ25.20mの範囲について実施した。土塁跡の基底部幅は6.80～8.20mで、市道側がかなり裾広がりとなっている。頂部は緩い馬の背状で、幅1.20～1.70mである。土塁跡の高さは国道に向かって徐々に低くなり、平坦地との比高差は1.60m前後である。なお、第73図の断面C-C'ラインでは、市道が国道に向かって急な坂道になっているため、路面との比高差は1.94mと見かけ上高くなっているものの、調査区側では僅かに1.00mである。

土塁の構築方法及び下部の遺構の確認を目的に

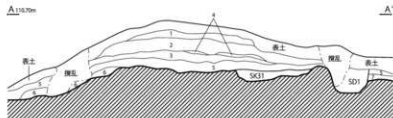
断ち割り調査を実施した。土塁の構築方法は旧表土、もしくは土塁の構築に伴う整地層と考えられる第5層（暗灰褐色土）によって一旦整地した後、暗褐色土を主体とする第1～4層が積み上げられていた。土塁構築土は総じてしまりがなく、明確な版築層などは確認されなかった。

土塁跡の下部からは、第23・28・31号土壌が検出されたほか、土塁跡の裾際の整地層を掘り込んだ第1号溝跡が検出された。これにより第1号土塁跡の構築は、土壌群の埋没以降であることが明らかとなった。さらに、市道側の土塁裾部に1箇所トレンチを設定した。トレンチからは土塁跡に伴う堀跡などの落ち込みは検出されなかったが、位置的に見て、市道部分が土塁に沿って開削された堀跡の可能性は十分に考えられる。

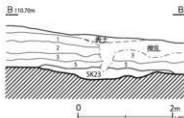
第75図が出土遺物である。遺物は、土塁跡の構築土を内から陶磁器、石臼、砥石などが少量出土した。

1は信楽焼（滋賀県）の摺鉢で、土塁の下部の整地層から出土した。内面に6条一単位のクシ描きによる摺目をもち、復元底径14.2cm、残存高

A 110.70m



B 110.70m



第1号土原

1 暗茶褐色土 しまりの強い暗茶褐色土を主体とする
ローム粒子を極少量含む
しまりあり 粘性なし

2 暗褐色土 しまりのない暗褐色土を主体とする

ローム粒子・ロームブロックを少量、全体にまだらに含む

しまりなし 粘性なし

3 暗褐色土 2層より若干粗るめの暗褐色土で、しまりのない土を主体とする

ローム粒子を極少量、全体にまだらに含む

しまりなし 粘性なし

4 暗褐色土 4層より灰色が強い暗褐色土で、しまりの強い土を主体とする

ローム粒子を極少量、全体にまだらに含む

しまりあり 粘性なし

5 暗褐色土 やや風みがあった暗褐色土で、若干砂質の土を主体とする

ローム粒子を極少量、全体にまだらに含む

しまりややあり 粘性なし

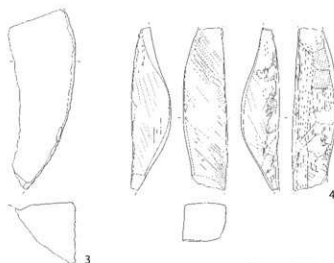
6 暗褐色土 暗褐色ロームブロックを主体とする層で、しまりのない暗褐色土が

小へ中程度混じる しまりあり 粘性なし

7 風褐色土 しまりのない風褐色土中にローム粒子を中量、全体にまだらに含む

しまりなし 粘性なし

第74図 土塁跡(2)



第75図 土塁跡出土遺物

0 10cm

9.7cmを測る。16世紀末から17世紀初頭の所産と考えられる。

2は大堀相馬焼（福島県）の手ひねり雅物の碗で、土壘構築土層から出土した。胎土には砂鉄を含み、透明の灰釉が掛けられている。見込みに型取りによる駒形、体部外面に型取りによる九曜と駒形を貼り付ける。復元口径7.7cm、器高8.5cm、底径4.8cmを測る。明治前期の19世紀前半の所産と考えられる。

3は安山岩製の石臼の破片で、土壘構築土層から出土した。上臼の一部で、摩擦面に溝が切られる。残存長14.2cm、復元径14.5cmである。

4・5は凝灰岩製の砥石で、土壘構築土層から出土した。4は上下端を欠損する。残存長12.9cm、幅3.5cm、厚さ3.0cm、重量166.4gである。5は上下端を欠損する。被熱のため全体に赤茶色に変色し、表面が脆くなっている。残存長10.6cm、幅3.8cm、厚さ3.2cm、重量156.7gである。

5. 溝跡

高麗石器時代住居跡遺跡第2・3次調査では、5条の溝跡が検出された。遺物が出土しなかったが、中近世に属するものであろう。

第1号溝跡（第76図）

F-10・11グリッドに位置する。調査区域外に延びるため、全容は不明だが、土壘に沿って南側に延びるものと考えられる。調査区南壁での土層には、土壘の盛り土が認められなかったことから、土壘の構築後に、裾部に沿うように掘削されたものと考えられる。現存部の全長は7.32mで、弧を描くように湾曲している。溝幅は上場で0.70～1.10m、下場で0.40～0.75mである。深さは南壁際が0.74mで、南東に延びるに従い、順次深さを減じている。遺物が出土しなかったため、時期は決め難いが、土壘から近世陶器が出土していることから、溝の構築時期も近世の可能性が高いといえる。

出土遺物が少なく、土壘の構築年代を特定することはできないが、唯一、最下層の整地層から出土した1の摺鉢は中世末から近世初頭に遡るものである。しかし、土壘の構築土中に含まれている陶磁器の大半は江戸後期から明治期にかけてのものであることや、土壘の下部から検出された土壌群の様相を考え合わせると、構築年代が中世にまで遡るかどうかは明確でない。現状では、江戸後期以降に構築されたものと位置づけるのが妥当と考えられる。また、土壘の性格についても、土壘に伴う堀跡が明確でなく、土壘の高さも低いいため、防衛的な性格は見られず、屋敷地の地境に掘削された構堀に伴う土壘の可能性もすてきでない。しかし、今回調査を実施した範囲の土壘が江戸後期以降に構築されたものであったとしても、「岡城」と呼ばれる土壘全体の構築年代や性格については、今後の周辺における調査の進展をまって総合的に判断しなければならないといえる。

第2号溝跡（第76図）

G-11・12グリッドに位置する。調査区域外に延びるため、全容は不明だが、溝幅は、上場で0.95～1.02m、下場で0.57～0.86mである。或いは長軸の長い土壘の可能性もある。

第3号溝跡（第77図）

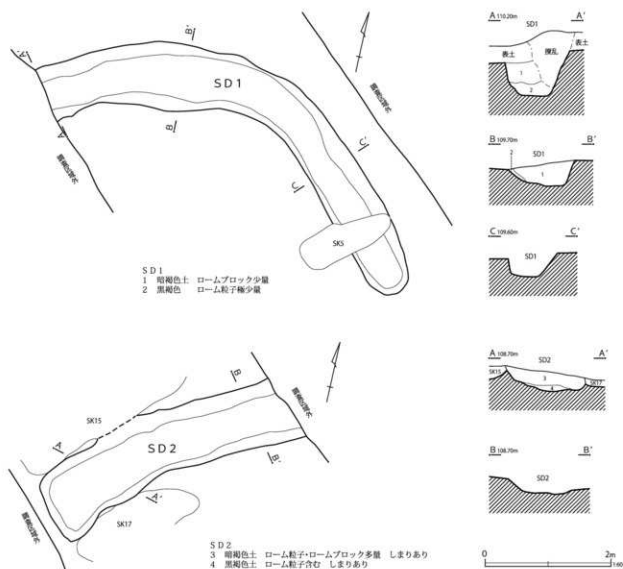
B・C-5・6グリッドに位置する。台地の肩部で、地形に沿うように構築されており、第7号住居跡や、第68・69号土壘を壊していた。

溝幅は、上場で0.80～1.25m、下場で0.13～0.25mである。逆台形に掘り込まれており、深さは0.40～0.80mである。

第4号溝跡（第77図）

D・E-9グリッドに位置する。第4A号溝は途切れながら延びており、調査区南東端で、小規模な第4B号溝と並走していた。

第4A号溝は、幅0.25～0.35m、長さが7.60m、



第76図 溝跡 (1)

深さが0.06～0.18mである。

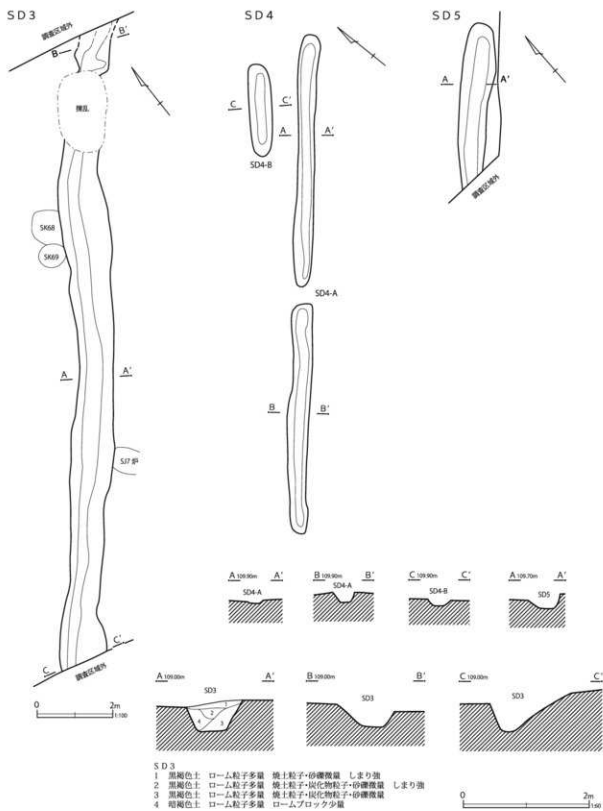
第4 B号溝は、幅が0.30～0.40m、長さが1.50m、深さが0.11mである。方向が土塁と一致していることから、関連する可能性も考えられるが、詳細は定かではない。

第9表 溝跡一覧表

遺構名	調査次	グリッド	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	主軸方位
SD-1	2	F-10・11	7.32	0.77～1.50	0.27～0.48	N-78°-E
SD-2	2	G-11・12	4.06	0.95～1.02	0.14～0.21	N-53°-E
SD-3	3	B-6 C-5・6	16.66	0.80～1.25	0.40～0.81	N-40°-E
SD-4 A	3	D・E-9	7.55	0.25～0.35	0.04～0.16	N-50°-E
SD-4 B	3	D-9	1.50	0.30～0.36	1.08	N-48°-E
SD-5	3	E-9・10	2.54	0.42～0.52	0.18	N-45°-E

第5号溝 (第77図)

E-9・10グリッドに位置する。調査区外に延びるため、全容は不明だが、幅が0.42～0.52m、深さが0.18mと、第4号溝に近く、方向もほぼ一致している。



第77図 溝跡(2)

6. ビット群

高麗石器時代住居跡遺跡第2次調査では、G・H-12・13グリッドを中心に、ビットが集中して検出された。この範囲で検出されたビットには、南北に列状に延びる箇所や東西に延びる箇所、「く」の字状に屈曲すると箇所が認められたため、この範囲から検出されたビットを有意なまとまりとして捉え、ビット群とした。

G-12・13グリッドは、斜面を掘削し、平場を形成したと考えられる部分である。ビット群は、平場の2か所に分布するようであり、便宜上西群と東群に区分した。西群のビットは、列状に調査区を横断しているが、東群のビットは、調査区のほぼ中央から東側に延びている。

ビットの径は0.30~0.60m、深さが0.20~0.70mと一様ではない、調査範囲内では配列が確定でき

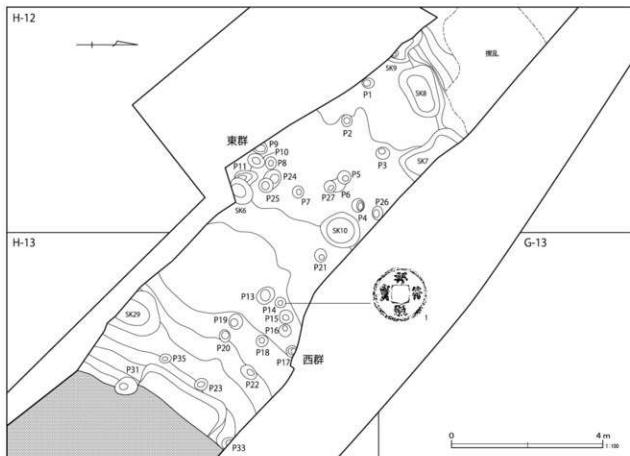
るものはないが、「く」の字状に屈曲する箇所があることから、建物の存在が推定される。なおP14からは古銭が出土した。

第3次調査では、住居跡や土壌等に伴わないビットは3基にすぎなかった。

第78図1はビット14から出土した銭貨である。「祥符通宝」(1009)で、風化が進んでいる。大きさは直径2.1cm、厚さ約0.1cmである。



第78図 ビット出土遺物



第79図 ビット群全体図

第10表 ビット一覧表

番号	調査次	グリッド	径 (m)	深さ (m)	番号	調査次	グリッド	径 (m)	深さ (m)
P-1	2	H-12	0.36×0.28	0.24	P-21	2	H-13	0.39×0.30	0.67
P-2	2	H-12	0.31×0.29	0.21	P-22	2	H-13	0.42×0.32	0.36
P-3	2	G・H-12	0.38×0.34	0.61	P-23	2	H-13	0.29	0.19
P-4	2	H-12	0.36×0.30	0.42	P-24	2	H-12	0.44×0.31	0.42
P-5	2	H-12	0.32	0.46	P-25	2	H-12	0.38	0.38
P-6	2	H-12	0.33×0.26	0.32	P-26	2	G・H-12	0.36×0.30	0.77
P-7	2	H-12	0.31	0.37	P-27	2	H-12	0.30	0.38
P-8	2	H-12	0.30	0.23	P-28	2	G-11	0.44×0.28	0.39
P-9	2	H-12	0.35×0.30	0.15	P-29	2	G-11	0.29×0.23	0.20
P-10	2	H-12	0.54×0.39	0.76	P-30	2	G-11	0.45×0.42	0.31
P-11	2	H-12	0.66×0.47	0.76	P-31	2	H-13	0.55×0.40	0.54
P-12	2	H-12	0.20	0.20	P-32	2	G-11	0.35	0.38
P-13	2	H-13	0.49×0.40	0.48	P-33	2	H-13	0.37	0.34
P-14	2	H-13	0.30	0.65	P-35	2	H-13	0.30×0.21	0.26
P-15	2	H-13	0.37	0.56	P-37	3	E-10	0.52×0.42	0.26
P-16	2	H-13	0.36×0.29	0.56	P-38	3	D-9	0.40	0.34
P-17	2	H-13	0.30×0.24	0.40	P-39	3	C・D-8	0.50×0.45	0.22
P-18	2	H-13	0.28	0.55	P-40	3	C-6	0.34×0.22	0.32
P-19	2	H-13	0.40×0.37	0.34	P-41	3	C-6	0.36×0.34	0.05
P-20	2	H-13	0.33×0.27	0.17					

7. その他の出土遺物

(1) 縄文土器 (第80図1～第82図81)

第Ⅰ群 (第80図1～3)

早・前期の土器を一括した。1は早期沈線文系土器で、平行沈線文間に刺突が施されている。2～3は諸磯b式で、2は浮線文系である。

第Ⅱ群 (第80図4～28)

勝坂式土器を一括した。4は円筒形土器の胴下半である。5は隆帯側にベン先状の竹管文が施文された土器で、6以下よりも古い土器であろう。6～21は隆帯により文様構成された土器で、隆帯上に刻みが施され、隆帯側には竹管文や沈線が並走するほか、区画内が沈線文や三叉文などにより充填されている。22～28は、勝坂式終末の土器群で、隆帯が平板化し、隆帯上の刻みも見られなくなる。27・28は、キャリパー状の口縁部で、縦長隆帯間に横走する隆帯が施文される、終末期に特徴的な土器である。

第Ⅲ群 (第80図29～第82図81)

中期後葉の土器を一括した。

第Ⅰ類 (第80図29～第81図56、70、第82図79～81)

加曾利E式土器を本類とした。29～44は燃糸を

地文とした土器、およびそれに類する土器である。

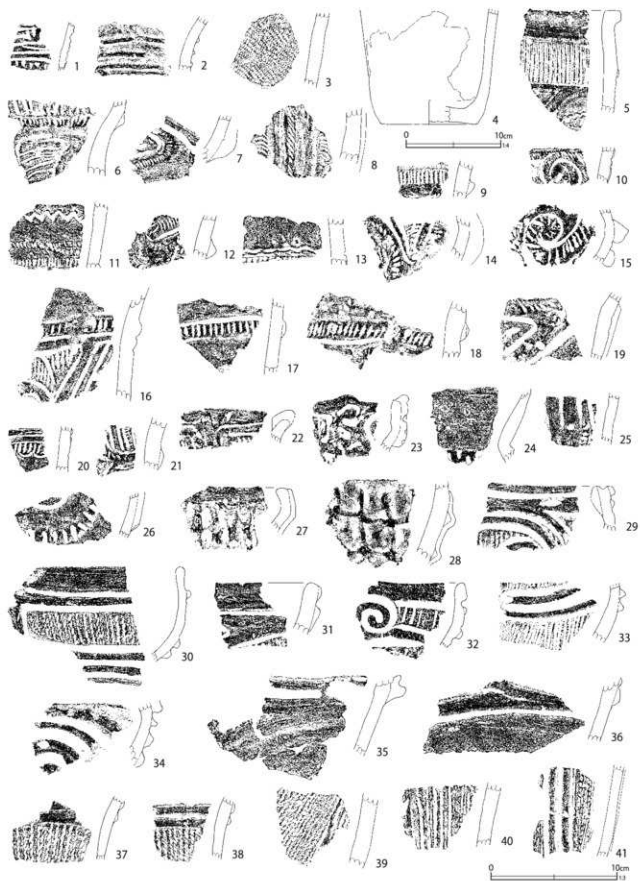
29・34は隆帯が立体的であり、30・32に比較してやや古い様相を有している。30・32は口縁部の湾曲が緩く、口端が直線的に立ち上がり、隆帯が扁平に整形されており、29・34に後続する土器であろう。35・36は頸部無文帯の破片である。

37～44に胴部破片を一括した。隆帯による懸垂文を特徴としている。

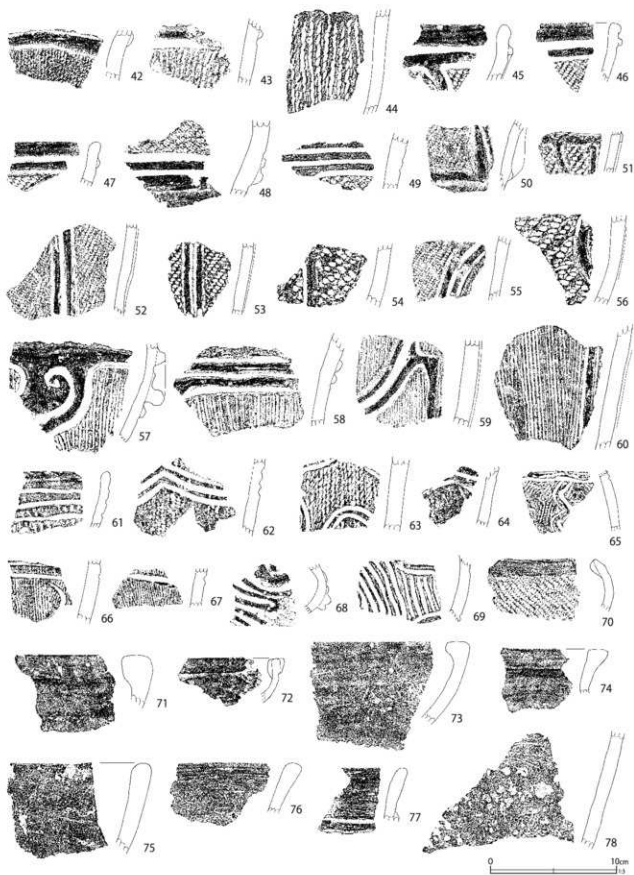
40～56には、縄文を地文とする土器群を一括した。口縁部・胴部ともに隆帯は扁平で、特に胴部には、器面との比高差が少ないものが多いようである。70は内湾する口縁部で、内面が肥厚する。口唇無文部下には、密な縄文が横走することから、加曾利EⅢ式と考えられ、高麗石器時代住居跡遺跡では、最も新しい段階の土器である。

79～81には底部破片を一括した。79・80は燃糸を地文とする。81の底部には、網代瓦痕が認められる。第2類 (第81図57～60、68・69)

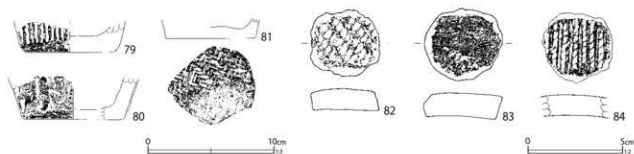
曾利式土器を本類とした。57は口縁部破片で、隆帯が突出し、隆帯間に渦巻状の沈線文が施文されている。



第80図 グリッド出土遺物 (1)



第81図 グリッド出土遺物 (2)



第82図 グリッド出土遺物 (3)

文様内は、ヘラ状工具による縦の沈線で充填されている。

58～60は、櫛歯状工具による条線を地文とする土器群で、57は頸部、59・60は胴部破片である。59には縦の懸垂文から延びる渦巻き文が施文されると考えられる。

68は密な隆帯により、曲線的な文様が構成された土器で、隆帯側に沈線が施されるとともに、隆帯上も丁寧にみがけられている。突起状となっている箇所があることから、文様が左右に分割されているものと思われる。69は文様の区画内や充填文がすべて沈線によって描かれている。

第3類 (第81図61～67)

連弧文系土器を本類とした。61～63は燃系地文、64・65が縄文地文、66・67が条線地文である。63のように、連弧文が上下対に施文されるものや、65・66のように、胴部に懸垂文が描かれる土器もある。

第4類 (第81図71～78)

無文の土器を一括した。71～73は口端が肥厚し、口唇上は平坦に整形されている。72には沈線が廻ることなどから、勝坂式と考えられる。

74～77は直線的に開く深鉢形土器の口縁部で、77には隆帯による区画が見られる。78は曽利式土器の胴下半であらう。

(2) 土製品 (第82図82～84)

すべて土製円盤である。土器片の周囲を粗く打

ち欠いており、研磨などによる整形は施されていない。いずれも加曽利E式の胴部破片を再利用したものである

(3) 石器 (第83図85～第84図101)

石礫 (第83図85)

無茎の石礫である。基部が欠損する。第3号溝跡覆土中から出土した。

スクレイパー (第83図86～88)

86と87は第1号土壘覆土中から出土した。86は剥片の鋭い縁辺部をほとんど加工せずにそのまま刃部として利用したものである。87は剥片の末端を調整し、刃部として利用されている。88は石錐にも見えたが、剥離面の観察から、つまみ部をもつ小形のスクレイパーと考えた。

打製石斧 (第83図89～第84図99)

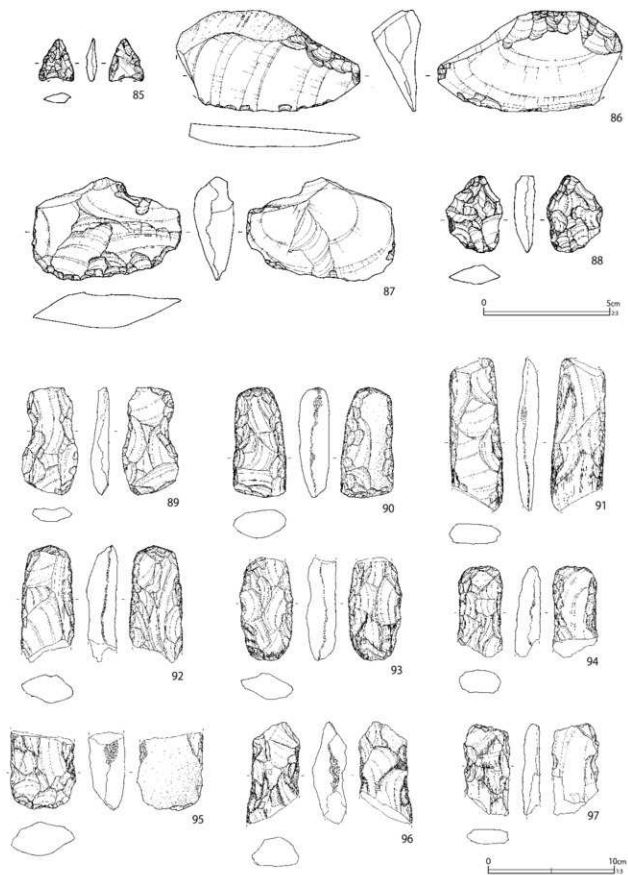
89～99に打製石斧を一括した。平面形は基本的に短冊形である。多くの資料で両側縁に敲打痕がみられ、刃部は摩耗痕がみられる。89の平面形は両側縁がわずかに凹んでいて分銅形に近い。91は上下端が欠損する。91、94、96、97は刃部が欠損する。95は上半部が欠損する。

磨石 (第84図100)

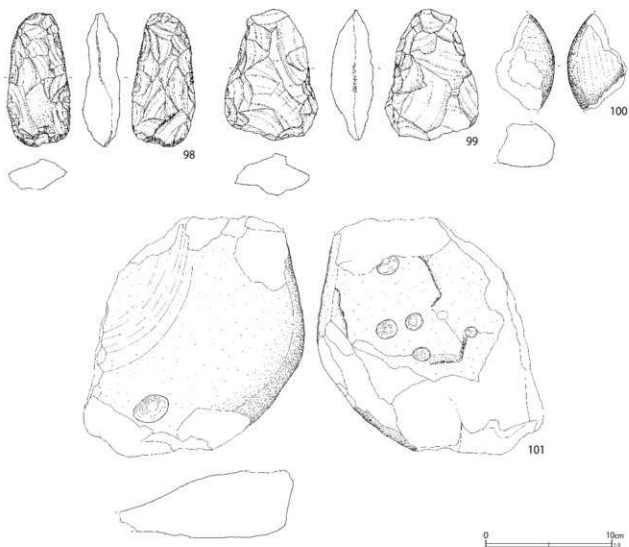
磨石の周縁部は敲打によって整形されており、平坦部は使用によって滑らかである。

石皿 (第84図101)

皿部は緩やかに凹んでおり、漏斗状の凹穴が数箇所みられる。全体の1/4ほど残存する。



第83図 グリッド出土遺物 (4)



第84図 グリッド出土遺物 (5)

(4) 近世遺物 (第85図1～4)

図示した遺物は、すべて第2次調査で出土した。
銭貨 (第85図1・2)

1・2は寛永通寶である。1は新寛永 (銅銭) の無背銭で、元禄10年 (1697) 初鋳。大きさは縦25.7mm、横25.7mm、銭厚1.1～1.2mm、重さ3.4gである。2は四文銭の背十一波で、明和6年 (1769) 初鋳。銅色はやや赤味を帯びる。大きさは縦28.2mm、横28.2mm、銭厚1.0～1.1mm、重さ3.7gである。双方とも上段遺構確認面の表採。

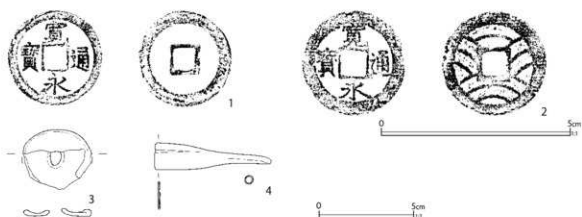
雁首銭 (第85図3)

3は煙管の火皿を意図的に平らに潰した、いわゆる雁首銭である。緒に混ぜたとも、緒縄の固定

に用いられたものともいわれている。真鍮製で、緑錆に覆われ、火皿の縁を欠損する。大きさは残存長1.6cm、幅1.8cm、厚さ0.1cm、重さ1.3gである。D-9グリッド出土。

煙管 (第85図4)

4は煙管の吸口である。竹製の羅字 (吸管) を挿入する小口が意図的に平らに潰され、大きく変形している。そのため縦着した箇所に亀裂が入る。真鍮製で、緑錆に覆われ、吸口の先端を欠損する。大きさは残存長6.2cm、小口幅1.4cm、吸口径0.5cm、重さは3.6gである。H-13グリッド出土。



第85図 グリッド出土遺物(6)

第11表 石器一覧表

種別	番号	出土遺構・位置	器 種	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
第17図	75	S J 1	打製石斧	安山岩	10.7	4.4	2.9	170.9	
第17図	76	S J 1	打製石斧	安山岩	9.9	4.2	2.2	110.9	
第17図	77	S J 1	打製石斧	頁岩	9.5	4.3	1.8	90.4	
第17図	78	S J 1	打製石斧	黒色頁岩	[5.8]	4.8	2.1	62.6	
第17図	79	S J 1	磨製石斧	緑色岩	[5.8]	[3.2]	[1.4]	25.2	
第19図	15	S J 2	スクレイパー	黒曜石	[2.7]	1.5	0.6	1.8	
第24図	16	S J 4	石鏃	チャート	2.3	1.6	0.5	1.4	
第24図	17	S J 4	打製石斧	頁岩	[5.8]	4.7	2.5	74.4	
第40図	207	S J 5	尖頭器	頁岩	[8.8]	3.5	1.3	33.0	
第40図	208	S J 5	石鏃	チャート	2.0	1.3	0.2	0.4	
第40図	209	S J 5 ^部	石鏃	黒曜石	2.0	1.1	0.4	0.5	
第40図	210	S J 5	石鏃	チャート	2.3	1.4	0.3	0.9	
第40図	211	S J 5	石鏃	黒曜石	2.5	2.1	0.5	1.9	
第40図	212	S J 5	石鏃	チャート	2.5	[1.9]	0.5	1.8	
第40図	213	S J 5	石鏃	チャート	[2.0]	[2.2]	0.6	2.0	
第40図	214	S J 5	石鏃	黒曜石	[1.6]	[1.6]	0.4	0.7	
第40図	215	S J 5	石鏃	チャート	3.5	2.0	0.6	3.0	
第40図	216	S J 5	石鏃	メノウ	[2.4]	1.7	0.6	2.4	
第40図	217	S J 5	スクレイパー	チャート	3.4	3.8	1.3	16.6	
第40図	218	S J 5	スクレイパー	チャート	4.0	2.7	1.3	11.2	
第40図	219	S J 5	スクレイパー	チャート	[2.3]	3.1	0.8	4.8	
第40図	220	S J 5	使用痕ある剥片	黒曜石	2.0	[1.9]	0.5	1.1	
第40図	221	S J 5	使用痕ある剥片	チャート	4.3	2.1	0.9	5.5	
第40図	222	S J 5	打製石斧	緑泥片岩	[11.7]	3.5	1.9	113.5	
第40図	223	S J 5	打製石斧	頁岩	9.8	4.6	3.1	158.8	
第40図	224	S J 5	打製石斧	緑泥片岩	[7.9]	4.4	1.9	87.8	
第40図	225	S J 5	打製石斧		8.2	4.2	1.6	71.3	
第40図	226	S J 5	打製石斧	頁岩	8.2	4.8	1.6	74.9	
第41図	227	S J 5	打製石斧	頁岩	7.9	5.3	2.5	88.0	タール状着物有
第41図	228	S J 5	打製石斧	片岩	10.6	4.4	2.3	128.3	
第41図	229	S J 5	打製石斧	黒色頁岩	10.0	4.7	2.1	120.6	
第41図	230	S J 5	打製石斧	砂岩	9.5	4.8	1.8	63.7	
第41図	231	S J 5	打製石斧	ホルンフェルス	9.1	4.0	1.6	62.2	
第41図	232	S J 5	打製石斧	頁岩	9.4	4.3	1.1	45.3	
第41図	233	S J 5	打製石斧	ホルンフェルス	7.3	3.8	1.8	50.0	
第41図	234	S J 5	打製石斧	片岩	[5.2]	4.1	1.5	32.5	

神国	番号	出土遺構・位置	器 種	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
第41図	235	S J 5	打製石斧	頁岩	5.8	6.3	2.0	78.8	
第41図	236	S J 5	打製石斧	頁岩	[7.3]	7.9	3.3	197.1	
第41図	237	S J 5	磨石		[5.4]	[7.9]	3.1	168.4	
第41図	238	S J 5	磨石	砂岩	[6.2]	[3.2]	[2.4]	47.4	
第41図	239	S J 5	磨石	砂岩	[8.1]	[13.3]	[3.0]	329.6	
第41図	240	S J 5	磨石	砂岩	[7.1]	[4.9]	3.7	151.6	
第41図	241	S J 5	石皿	閃緑岩	[11.6]	[9.6]	3.2	531.7	
第51図	63	S J 6	スクレイパー	頁岩	[5.6]	[5.5]	1.4	24.6	
第51図	64	S J 6	打製石斧	安山岩	6.9	4.9	1.7	69.8	
第51図	65	S J 6	打製石斧	安山岩	9.9	3.8	2.3	97.6	
第51図	66	S J 6	打製石斧	安山岩	[6.8]	3.2	1.7	42.4	
第51図	67	S J 6	打製石斧	ホルンフェルス	6.5	3.7	1.4	39.3	
第51図	68	S J 6	打製石斧	頁岩	6.1	3.0	1.0	24.9	
第51図	69	S J 6	打製石斧	片岩	28.9	12.6	4.4	1840.1	未製品
第51図	70	S J 6 研	磨石	砂岩	16.8	8.5	5.2	928.8	
第51図	71	S J 6	磨石	砂岩	[10.7]	6.4	2.9	240.4	
第52図	72	S J 6	磨石	砂岩	[6.6]	5.8	3.5	144.4	
第52図	73	S J 6	磨石	安山岩	8.3	7.2	5.5	424.7	
第52図	74	S J 6	凹石	緑泥片岩	[16.4]	[7.7]	[1.2]	158.9	
第66図	3	SK 2	打製石斧	ホルンフェルス	[6.2]	4.9	2.1	71.7	
第66図	21	SK 3	磨石	安山岩	[5.4]	[3.8]	4.2	86.2	
第67図	30	SK 6	打製石斧	片岩	[6.3]	5.0	1.8	73.1	
第68図	72	SK 18	打製石斧	安山岩	[8.5]	5.2	3.0	143.2	
第68図	73	SK 18	石棒	緑色岩	[6.3]	[4.0]	[1.4]	44.0	
第68図	74	SK 19	打製石斧	砂岩	[6.7]	4.3	1.4	51.2	
第68図	81	SK 24	打製石斧	安山岩	[8.8]	5.1	2.1	104.6	タール状着物有
第69図	112	SK 40	スクレイパー	頁岩	8.5	2.8	1.6	32.7	
第70図	134	SK 58	磨製石斧	蛇紋岩	6.9	3.6	1.5	64.7	
第70図	152	SK 62	石皿	緑泥片岩	[20.7]	[15.3]	4.7	2098.8	
第71図	157	SK 70	尖頭器	チャート	[2.4]	2.6	1.1	6.4	
第71図	158	SK 70	スクレイパー	チャート	3.3	[3.7]	0.9	10.9	
第75図	3	F 10	石臼	安山岩	[14.2]	[5.4]	[4.8]	309.7	上白 径(14.5)cm
第75図	4	F 10	砥石	凝灰岩	[12.9]	3.5	3.1	166.4	
第75図	5	F 10	砥石	凝灰岩	[10.6]	3.8	3.2	156.7	被熱?
第83図	85	C 6	石鏃	黒曜石	[1.7]	1.4	0.4	0.6	
第83図	86	F 10	スクレイパー	チャート	4.0	[7.3]	1.9	37.5	
第83図	87	表掘	スクレイパー	チャート	4.1	5.9	1.6	33.6	
第83図	88	F 10	スクレイパー	チャート	3.1	2.2	0.8	5.4	
第83図	89	F 10	打製石斧	黒色頁岩	8.5	4.5	1.4	59.7	
第83図	90	C 7	打製石斧	安山岩	8.7	4.2	2.4	119.2	
第83図	91	C 6	打製石斧	安山岩	[12.1]	4.3	1.8	110.3	
第83図	92	C 6	打製石斧	緑色岩	[9.3]	4.3	2.4	116.1	
第83図	93	表掘	打製石斧	安山岩	[8.2]	4.3	2.4	103.7	
第83図	94	C 8	打製石斧	緑色岩	[7.2]	3.6	2.0	58.9	
第83図	95	表掘	打製石斧		[6.2]	5.3	2.9	231.2	
第83図	96	G 12	打製石斧	安山岩	[8.1]	4.3	2.7	90.7	
第83図	97	F 10	打製石斧	緑泥片岩	[7.2]	3.7	1.4	59.4	
第84図	98	表掘	打製石斧	ホルンフェルス	10.6	5.1	2.9	150.6	
第84図	99	F 10	打製石斧	黒色頁岩	10.3	7.5	3.4	119.1	
第84図	100	表掘	磨石	閃緑岩	[7.6]	[4.7]	[3.4]	130.7	
第84図	101	F 10	石皿	緑泥片岩	[19.1]	[17.6]	5.3	2425.9	

第12表 土製品一覧表

押印	番号	造 構	長径 (cm)	短径 (cm)	内径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
第17図	80	S J 1	3.5		2	2.4	20.6	耳飾り
第17図	81	S J 1	3.5	3.1			10	土製円盤
第17図	82	S J 1	2.4	2.25			8.8	土製円盤
第19図	16	S J 2	3.3				10	土製円盤
第39図	199	S J 5	2.5	1.5				土偶
第39図	200	S J 5	2.2	1.4		2.6	11.1	耳飾り
第39図	201	S J 5	3.2	2.6		2	6.1	耳飾り
第39図	202	S J 5	3.2				9.7	土製円盤
第39図	203	S J 5	3.4				15.6	土製円盤
第39図	204	S J 5	3.3				12.6	土製円盤
第39図	205	S J 5	3.7	3.35			15.3	土製円盤
第39図	206	S J 5	3.5				15	土製円盤
第51図	62	S J 6	2.4	1.8	1.2	2	3.3	耳飾り
第82図	82	グリッド	3.6				18.9	土製円盤
第82図	83	グリッド	4.1				22.6	土製円盤
第82図	84	グリッド	3.8				18.6	土製円盤

V 自然科学分析

黒曜石石器に関する産地推定

はじめに

日高市に所在する高麗石器時代住居跡遺跡出土の黒曜石製石器について、産地を推定した。

方法などについては、基本的な原理に変更はな

第13表 装置の設定

メーカー	リガク電気	品 名	ZSX-mini
型 式	波長分散型	管 球	Pd
管 電 圧	40kV	管 電 流	1.20mA
雰 囲 気	真空 (約6.0Pa)	照 射 径	20mm
フ ィ ル ム	Mylar X-ray film Cat.150		
付 属 品	試料自動交換 12ターレット		

第14表 測定の詳細

元 素 名	Na	Mg	Al	Si	P	K	Ca	Ti
測 定 線	K α	K α	K α	K α	K α	K α	K α	K α
ス リ ッ ト	Std	Std	Std	Std	Std	Std	Std	Std
分 光 結 晶	TAP	TAP	PET	PET	PET	PET	LiF 1	LiF 1
検 出 器	F-PC	F-PC	F-PC	F-PC	F-PC	F-PC	F-PC	F-PC
P H A 調 整	100	100	100	100	100	100	160	170
P H A 調 整	300	300	300	300	300	300	280	280
ピーク位置 /deg	55.120	45.190	144.610	109.045	89.465	50.660	113.040	86.110
B G 位置 1 /deg	53.000	43.000	140.200	106.000	86.500	48.550	111.000	84.000
B G 位置 2 /deg	56.500	47.500	147.800	112.000	91.500	53.550	115.000	87.700
測定時間 P /sec	120	120	20	60	60	30	30	30
測定時間 B /sec	120	120	20	30	30	20	20	20
元 素 名	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Ba	
測 定 線	K α	K α	K α	K α	K α	K α	L α	
ス リ ッ ト	Std	Std	Std	Std	Std	Std	Std	
分 光 結 晶	LiF 1	LiF 1	LiF 1	LiF 1	LiF 1	LiF 1	LiF 1	
検 出 器	S-PC	S-PC	S-PC	S-PC	S-PC	S-PC	S-PC	
P H A 調 整	150	140	160	150	160	100	150	
P H A 調 整	250	260	250	260	250	300	250	
ピーク位置 /deg	62.950	57.495	26.600	25.135	23.758	22.540	87.135	
B G 位置 1 /deg	62.000	56.000	26.000	25.000	21.000	21.000	85.000	
B G 位置 2 /deg	64.000	58.500	27.700	26.000	26.000	26.000	88.000	
測定時間 P /sec	30	30	60	120	120	120	120	
測定時間 B /sec	20	20	60	120	120	120	120	

第15表 分析試料と推定した産地

採回	番号	出土位置	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	実測%	調査時	推定した産地
19	15	S J 2	スクレイパー	黒曜石	[2.7]	1.5	0.6	1.8		S J 2-1	2次	不明(男女食群か)
40	209	S J 5 非	石鏃	黒曜石	2.0	1.1	0.4	0.5		S J 5-47	3次	恩馳島群
40	211	S J 5	石鏃	黒曜石	2.5	2.1	0.5	1.9		S J 5-44	3次	和田峠群
40	214	S J 5	石鏃	黒曜石	[1.6]	[1.6]	0.4	0.7		S J 5-39	3次	不明
40	220	S J 5	使用痕のある?片	黒曜石	2.0	[1.9]	0.5	1.1		S J 5-41	3次	不明
83	85	C-6	石鏃	黒曜石	[1.7]	1.4	0.4	0.6		S D 3-1	3次	不明
非掲載	—	S J 1	剥片	黒曜石	1.8	1.8	1.4	4.4		S J 1-8	2次	男女食群
非掲載	—	S J 1	剥片	黒曜石	[1.1]	0.8	0.4	0.3		S J 1-9	2次	不明
非掲載	—	S J 1	剥片	黒曜石	[1.5]	1.7	0.3	0.7		S J 1-10	2次	恩馳島群
非掲載	—	S J 1	剥片	黒曜石	0.7	0.6	0.4	0.2		S J 1-11	2次	不明
非掲載	—	S J 1	剥片	黒曜石	[1.4]	2.8	1.4	1.8		S J 1-12	2次	男女食群
非掲載	—	S J 1	剥片	黒曜石	2.3	1.0	0.5	0.8		S J 1-13	2次	屋ヶ台群
非掲載	—	S J 1	剥片	黒曜石	1.1	1.0	0.5	0.5		S J 1-14	2次	男女食群
非掲載	—	S J 1	剥片	黒曜石	1.8	1.0	0.4	0.4		S J 1-15	2次	不明
非掲載	—	S J 1	剥片	黒曜石	0.5	0.3	—	—		S J 1-16	2次	不明
非掲載	—	S J 2	剥片	黒曜石	0.3	0.4	—	—		S J 2-2	2次	不明
非掲載	—	S J 5	剥片	黒曜石	2.0	1.2	0.4	1.3		S J 5-55	3次	不明
非掲載	—	S J 5	剥片	黒曜石	1.4	2.1	0.6	1.3		S J 5-56	3次	不明
非掲載	—	S J 6	剥片	黒曜石	1.6	1.2	0.1	0.3	石鏃製作剥片	S J 6-15	3次	屋ヶ台群
非掲載	—	S J 6	剥片	黒曜石	2.5	1.9	1.4	7.0		S J 6-16	3次	恩馳島群
非掲載	—	S J 6	剥片	黒曜石	[2.0]	2.1	0.4	1.6		S J 6-17	3次	屋ヶ台群
非掲載	—	S J 6	剥片	黒曜石	3.8	1.8	0.6	6.0		S J 6-18	3次	屋ヶ台群
非掲載	—	S J 6	剥片	黒曜石	1.1	1.1	0.4	0.5		S J 6-19	3次	男女食群
非掲載	—	S J 6	剥片	黒曜石	1.4	0.7	0.1	0.2		S J 6-20	3次	不明
非掲載	—	S J 6	剥片	黒曜石	1.6	0.9	0.2	0.3		S J 6-21	3次	屋ヶ台群
非掲載	—	S J 6	剥片	黒曜石	0.3	1.0	0.4	0.5		S J 6-22	3次	不明
非掲載	—	S J 6	剥片	黒曜石	0.7	1.3	0.1	0.1		S J 6-23	3次	不明
非掲載	—	S J 6	剥片	黒曜石	1.1	1.4	0.3	0.4		S J 6-24	3次	屋ヶ台群
非掲載	—	S K 66	剥片	黒曜石	2.0	[1.0]	0.5	0.9		S K 66-6	3次	不明

いので、詳細は当事業団の研究紀要を参照された
い。

1 対象資料

分析対象とした資料は、高麗石器時代住居跡遺
跡から出土した黒曜石製の石器であり、掲載品、
非掲載品の全てを含む。ただし、整理番号で SJ2-
2、SJ1-16としたものは、微細な剥片であったため
測定しなかった

2 データの諸元

設定は第12・13表に示した。

3 分析結果

分析結果について、推定した産地を第14表に示
した。推定した産地の多くは信州系であり、3点
のみ恩馳島群が含まれていた。

恩馳島群と推定した3点について接合を試みた
が、色調や透明度に個体差があり、同一母岩では
ないと考えられた。

なお、不明としたものの大半は、資料表面の汚
れや大きさの不足から産地推定に必要な精度の値
が求められなかったものである

VI 調査のまとめ

1. 調査の成果

高麗石器時代住居跡遺跡は、高麗丘陵から延びる標高約110m前後の台地上に形成された遺跡である。昭和4年に発掘調査が行われ、県内で初めて竪穴住居跡が調査された遺跡として知られている。その後、一般国道299号の整備事業に伴い、当事業団により平成20年に第2次調査が、平成23年に第3次調査が実施され、縄文時代中期と中近世の遺構や遺物が見えられた。

(1) 縄文時代の遺構分布

これまでの発掘調査及び日高市教育委員会が平成20年度に実施した範囲確認調査の成果をもとに、高麗石器時代住居跡遺跡の縄文時代の遺構分布と集落の広がりについて考えてみたい。

第2次調査では、両側を谷に開析され、高麗川に向かって舌状に延びる台地の中央部から南側を調査した。台地の中央部からは住居跡の検出はなく、土壌が散在する程度であった。住居跡は肩部から緩斜面部にかけて、2軒が重複した状態で検出され、第2号住居跡には建て替えあるいは拡張の痕跡も認められた。しかし、調査区の幅員が狭かったため、規模や詳細などは確認できなかった。

時期は不明だが、住居跡の南東側には斜面を開削して平場が造成されたことから、縄文時代の遺構が消失した可能性もある。

平成20年度に、国道299号の北西側を対象に日高市教育委員会が遺跡の範囲確認調査を実施し、史跡に登録された高麗石器時代住居跡の周囲に多数の住居跡を検出した。それらの分布には、やや薄い部分と重複した状態で濃密な部分が存在することが明らかとなった。第5図および第86図は、日高市教育委員会の御厚意により、その成果の一部を掲載させていただいたものである。

平成23年度に当事業団が実施した第3次調査では、台地北側の肩部から緩斜面部で多数の住居跡

が検出されたが、住居跡群の南側は土壌が散在する程度で、遺構の分布は極めて希薄であった。以上のことから、高麗石器時代住居跡遺跡は、縄文時代中期後半期を中心とする環状集落であり、住居跡群の内側には、遺構の少ない空間が存在することが明らかとなった。

第2次と第3次調査では、縄文時代早期の沈線文系土器と前期後半の諸磯Ⅱ式土器が出土したが、遺構に伴うものではなく、量も極めて少なかった。

中期では、新道式から藤内式土器が出土しているが、こちらも量的には少なく、遺構に伴うものはない。ややまとまった量が出土するのは、勝坂式の末葉から加曽利Ⅱ式後半期である。このうち、勝坂式末葉の土器は、第5b号ないし第5c号住居跡に関連すると考えられるものである。周辺遺跡の縄文時代中期中葉から後半期の集落形成からみて、この時期の遺構が存在した可能性は高いといえる。

昭和4年の調査で見えられた高麗石器時代住居跡は、当初弧形の住居として報告されていたが、床面には複数の跡が存在することから、複数軒の重複であるとともに、拡張ないしは建て替えが行われていたことは明らかである。住居跡の時期は判然としないが、『日高市史 原始・古代編』に掲載された写真などを見ると、加曽利Ⅱ式新段階前後の可能性が高いようである。

以上の成果を総合すると、高麗石器時代住居跡遺跡の縄文時代中期の住居跡は、標高110m前後の等高線に沿うように、台地の肩部から緩斜面部にかけて分布している可能性が高いことが分かる。また、昭和6年に実施された調査においては、高麗石器時代住居跡の周辺に、高麗3号～5号住居跡の3軒の住居跡が検出されており、現在の国道299号の東側にも、高麗石器時代2号住居

跡が存在することが明らかとなっている。

以上のことから、高麗石器時代住居跡遺跡は縄文時代中期中葉から後半期に形成された環状集落であり、住居跡はほぼ現在の地形に沿って東西に細長く展開している可能性が高いと考えられる。

(2) 中近世の遺構

土壘や土塙・溝等が検出された。土壘跡の性格については定説がなく、時期も不明であったが、

2. 出土土器について

高麗石器時代住居跡遺跡では縄文時代早期を始め、前期後半、中期前半の土器が出土したが、遺構に伴うものではなく出土量も極めて少ない。遺構に伴う土器は勝坂式終末から加曽利E式にかけてであるため、ここでは、住居跡出土土器の時期区分を行い、集落分析の基礎資料として提示しておきたい。なお、復元できた資料が少ないため、補完的に破片も掲載した。

(1) 高麗石器時代住居跡遺跡の土器変遷

第Ⅰ期 (第86図1～7)

勝坂式終末期に相当すると共に、加曽利EⅠ式の出現期にあたる。当該資料は、第5号住居跡の埋土中から出土した。1は燃糸を地文とする深鉢形で、口縁部に沈線文が施文されることから、勝坂式終末に位置することは明らかである。この他、3の器台や、2の口縁部が赤彩された鉢形土器などが、土器群の組み合わせとして抽出された。また、2のように、口唇部にレンズ状の貼付文を持つ特徴的な土器や、3の縦位に隆帯が貼付された土器などが、この時期の組成を構成するものと考えられる。

6・7はいわゆる中峠系の土器であろう。細い隆帯で曲線的な文様が描かれている。胎土や整形は大木8a式土器や第Ⅱ期に近い特徴がある。

第Ⅱ期 (第86図8～10)

加曽利EⅠ式に相当する土器を第Ⅱ期としたこの時期の遺構には第1号住居跡があげられるが、

第2次調査で、土壘跡の下部から16世紀末から17世紀初頭と考えられる常滑の播鉢が出土したことから、土壘跡が近世初頭に築かれた可能性が高いと言える。

調査区域内では、斜面を掘削して平場が造られていた。近世の所産と考えられるが、性格や他の遺構との関係を明らかにすることはできなかった。

器形や文様がわかる資料が少ない。第5号住居跡には、勝坂式終末から加曽利EⅡ式期の土器が含まれていたため、該当する資料を抽出した。

1・2が、第1号住居跡から出土した。1は同心円のモチーフを持つ深鉢形土器で、7の孤状の隆帯文をもつ土器と、器形や文様体幅、整形などが類似する。

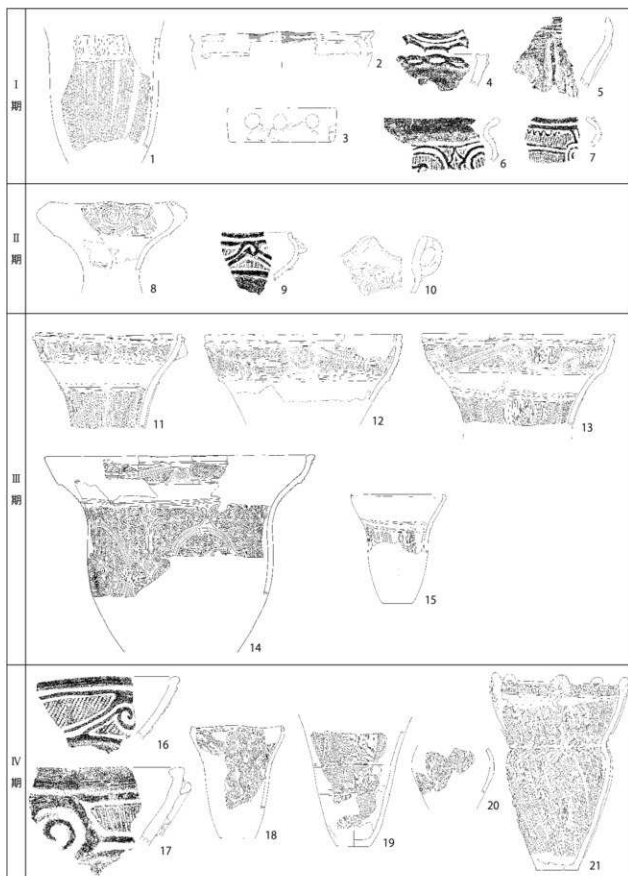
8～10は、第5号住居跡から出土した。8は横S字状の隆帯文の土器と想定され、口唇無文部に環状の把手をもつ深鉢形土器である。

第Ⅲ期 (第86図11～15)

加曽利EⅡ式古段階の土器群で、第6号住居跡の埋土や床面出土土器をこの段階とした。加曽利EⅡ式土器は、いずれも頸部に無文帯をもち、口縁部は湾曲の度合いが弱く、直立気味に開く点が特徴である。口縁部文様体が幅狭くなるとともに、胴部の湾曲も弱まり、全体に細長くなる傾向が窺える。1は口縁部の渦巻き文が省略され、区画文のみで構成される土器である。加曽利EⅡ式の地文には、この段階まで燃糸文が用いられるようである。12・13は、住居の埋土に用いられていた土器で、横S字状文を主文様とする。

14は胴部縦区画文間に、横S字状のモチーフが描かれる土器で、渦巻き状の沈線文部分が、剣先状に突出している。大木8b式のだが、口縁部文様は12・13と共通する。

15は曾利式で、遺物に占める割合はさほど多い



第86图 土器変遷図

わけではない。

第Ⅳ期（第86図16～21）

加曾利EⅡ式新段階の土器群で、連弧文系土器を伴っており、5号住居跡出土土器の主体をなす土器である。高麗石器時代住居跡遺跡第2次、第3次調査で、遺構に伴う土器群はこの段階までであることや、この時期以降の土器が極めて少ないことから、集落自体の終末期に相当するものと考えられる。加曾利E式土器が少ないため、16の破片を代表例とした。加曾利E式は、この段階になると地文が縄文のみとなり、燃糸は、連弧文系土器に見られるに過ぎない。また、連弧文系土器が目立つ反面、加曾利E式土器の割合が減る傾向が窺える。17は曾利式の影響を受け、地文が沈線に置換されている。

18・20が連弧文系土器である。18のように、胴上部にのみ連弧文が施文されるものや、20のように多段に施文されるものなどがある。モチーフもバリエーションが豊富なようで、対弧状に施文されたものなどがある。

20・21は曾利式土器である。21は、隆帯により胴部と頸部が区画され、幅狭い口縁部に2列の刺突が施されること、頸部と胴部に、隆帯による縦の蛇行懸垂文が施されることなどから、曾利式の様相を色濃く持っている。しかし、口縁部文様が5単位であることや、頸部の懸垂文が突起と連動せず、位置をずらしていることなどは加曾利E式的である。また、口縁部に2列の竹管文を施文し、地文に燃糸を用いる点、頸部に懸垂文を施文する点などは、連弧文系の様相を帯びている。以上の点から、この土器は、加曾利E式、連弧文系土器、曾利式の要素が混在したものといみなされる。

高麗石器時代住居跡遺跡第2・3次調査では、加曾利EⅡ式新段階以降の土器がほとんど出土していない。丘陵地帯に営まれた新田東遺跡や八王子遺跡でも、同様の傾向が窺えることから、本遺跡もこの頃に、集落の衰退期を迎えたものと考え

られる。

（2）他遺跡との比較

ここで、高麗石器時代住居跡遺跡周辺部の遺跡出土土器と比較してみよう。周辺には縄文時代中期の集落跡が数多く存在し、資料も豊富なことから、典型的な資料をもとに比較したい。

第Ⅰ期（第87図1～20）

大井町（現富士見野市）西ノ原遺跡第60号住居跡（今井ほか 1996）と、毛呂山町まます遺跡（金子 2001）第5c号住居跡を基準資料とした。図示した土器群のうち、勝坂式土器については、終末期にあたる井戸尻Ⅱ式と捉えられる土器群（谷井ほか 1982）であるとともに、加曾利E式土器の出現期にあたる。新形式の出現をもって画期を設定するのであれば、この段階を加曾利E式古段階として再評価すべきであろう。

1～12が西ノ原遺跡出土第60号住居跡出土土器である。勝坂式終末期の土器が主体で、口縁部は1・4のキャリバー形や、3のような球形のものが、直線的に開く胴部の深鉢形土器とともに、5・6の筒状の深鉢などがある。高麗石器時代住居跡遺跡第5号住居跡出土土器（第86図1）は、地文が燃糸で、胴部に文様はないが、6と口縁部文様が共通している。16のまま上遺跡例は、5の西ノ原遺跡例と比較しても、時期差を感じさせないものである。

9・10のように、屈曲する胴下部が特徴的である。また、7・8、11のように、胴中部に最大径を持つ樽方に近い深鉢などがある。施文される文様も多様だが、口縁部に集中し、胴部が地文のみのものや、胴部に文様の主体を持つものなど、器形と不可分な関係がある。

主文様や区画は、隆帯とともに沈線による施文が盛んになるとともに、隆帯上の刻みや刺突などが省略され、平板化する傾向が窺える。西ノ原遺跡では、これらの土器とともに、12の加曾利EⅠ式土器が出土した。

まます遺跡第5c号住居跡からは、13~15の加曾利EⅠ式土器とともに、16~20の勝坂式が出土した。13~15の口縁部には、半球状の連続するモチーフや、単独孤状モチーフ、横S字状の変形モチーフなどが施文され、すべて異なるモチーフであると推定されている。胴部は横帯区画され、横S字状のモチーフが展開しているが、縦区画はない。15の口縁部から垂下する隆帯は、西ノ原遺跡第60号住居跡4・11に近く、口縁部と胴部を区画する沈線上を垂下する点も、11との近似性を感じさせる。口唇部の外反する無文帯や、湾曲の度合いが強いキャリアー形の口縁部などには、勝坂式との共通性も窺える。また、この段階には、勝坂式の分帯構成に通じる、頭部無文帯のない土器とともに、無文帯を持つ土器も出現しており、両者に時間差がないことも明らかである。

高麗石器時代住居跡遺跡第5号住居跡で出土した第86図5は、縦の隆帯が貼付された土器である。関連した資料は、八王子遺跡（柳戸・村上1999）第46号住居跡、松ノ木遺跡（高橋ほか1980）第35号住居跡で出土している。特に松ノ木遺跡では、勝坂式終末期の土器群と共伴している。分布は比企から西部地域に偏っているようである。

まます遺跡で、加曾利EⅠ式とともに出土した勝坂式土器は、16のように、縦の区画が沈線に置き換えられるとともに、文様も沈線に描かれている。16のまます遺跡例は、5の西ノ原遺跡例と比較しても、時期差を感じさせないものである。

胴部の縦走する燃糸は、縦に条方向を持つ勝坂式の単節縄文原体と条の方向が一致しており、前段階には出現し、この時期にはかなり普及していたようである。また、この地域の加曾利EⅠ式土器の地文は、燃糸一色である。加曾利EⅠ式古段階の土器については、上記2遺跡に加え、飯能市加能里遺跡（富元1998）第21号住居跡や、同市中郷遺跡（柳戸1998）第8号住居跡、狭山市丸山遺跡（石塚2003）第8号住居跡、青梅市駒木野

遺跡（吉田ほか1998）第26号住居跡からも、勝坂式終末期の土器群とともに出土していることから、加曾利EⅠ式土器は、勝坂式の終末期に出現するとみなして大過ないであろう。従って、従来埼玉県で加曾利EⅠ式古段階の標識とされた、岩の上遺跡（栗原・今泉1973）第23号住居跡の資料は、この段階に帰属する可能性が高いと言える（石塚2012）。

加曾利EⅠ式古段階の土器は、普遍的に存在するわけではない。現在までの資料の蓄積から見ると、関東西部地域から多摩地域で出現するようである。勝坂式の伝統がさほど強くない地域と置き換えてもよいかもしれない。また、この地域にあっても、松ノ木遺跡（高橋ほか1980）第35号住居跡のように、加曾利EⅠ式を伴わず、勝坂式のみで組成される土器群も多い。このため、加曾利EⅠ式の出現を時期区分の指標とすると、判断に苦慮する状況があった点は否めないであろう。

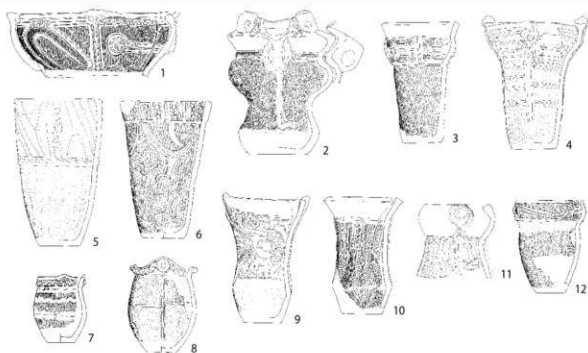
第Ⅱ期（第88図1~5）

加曾利EⅠ式新段階の土器群である。ここでは、新田東遺跡第53号住居跡を基準とした。新田東遺跡第53号住居跡には勝坂式終末の第Ⅰ期平行の土器が含まれていたため、型式学的な検討をもとに、第Ⅱ期の土器群を抽出した。

1は口縁部モチーフの先端が剣先状に構成される土器で、前段階には存在しており、この段階で加曾利EⅠ式の装飾として完成したように見受けられる。

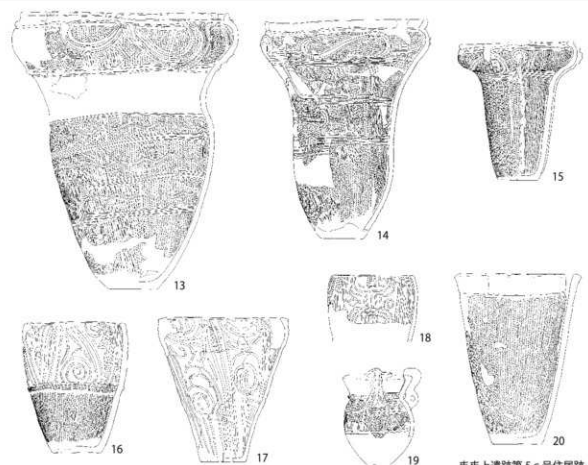
2は、口縁部文様帯に孤状の隆帯文が描かれた、いわゆるつなぎ弧文の土器で、隆帯の接点が出する傾向が強い。

4・5は特徴的な胴部文様をもつ土器である。いずれも器面を縦に分割する懸垂文から延びるように、クランク状や逆U字状のモチーフが描かれており、モチーフの屈曲部や接点などが剣先状に施文されている。またモチーフの接点には、渦巻き状の沈線が施文されることが特徴である。4は



西ノ原遺跡第60号住居跡

1
期



まま上遺跡第5c号住居跡

第87図 周辺遺跡の土器 (1)

隆帯と沈線、5は沈線で施文され、2単位に構成されるものであろう。5の口縁部は強く内湾し、いわゆる大木8b式の印象が強いが、モチーフは勝板式に起源をもつものであろう。大木式や曾利式も含めて、文様構造の分析を広範に行う必要がある。

この時期の土器組成に勝板式土器が伴うことはない。かつて、頸部無文帯の有無が加曾利E式土器を新旧に区分する特徴とされていたが、まます遺跡や駒木野遺跡の一括資料では、加曾利E式の成立当初から両社が存在することは明らかである。第88図15のように、頸部無文帯を持たない加曾利E式土器は、勝板式の伝統を引くものと言え、頸部無文帯を持つ土器の隆盛は、勝板式の衰退と機を一にするものと言えよう。

この段階の加曾利E式土器は、前段階と比較すると、胴部や口縁部の湾曲度合いが弱まり、長胴化する傾向が窺える。また、口縁部文様体の幅が狭まるとともに、直立気味に開くようになる。口縁部文様も、1や4の横S字状文や、2・5の孤状の連続からなるつなぎ文ないしは腕背文などのモチーフが確立し、主要なモチーフを構成するようになってくる。いわば、加曾利E式土器が確立し広範囲に波及した段階と言えるだろう。

3は同心円状に沈線が描かれる土器で、高麗石器時代住居跡遺跡第1号住居跡で出土した第15図1に近い。類似した土器は、八王子遺跡第36号住居跡や、池田遺跡（佐々木ほか 1976）第19号住居跡から出土しており、西部地域的な土器と言えよう。

第Ⅲ期（第88図6～9）

加曾利EⅡ式古段階の土器群である。比較すべき資料は多いが、ここでは新田東遺跡第46号住居跡出土土器を取り上げた。

出土土器の主体を占めるのは、加曾利E式キャリパー形土器である。前時期に確立した器形・文様帯・文様構成を踏襲しつつも、文様を構成する

隆帯が平板化し、立体感に乏しくなる傾向がある。前時期の土器の主流であった縦条の燃り糸地文の割合が減少し、縄文地文や櫛歯状工具による条線地文の割合が増してくる。恐らく後者は、曾利式の影響下に、燃り糸文が置き換えられたものであろう。

高麗石器時代住居跡遺跡第6号住居跡からは、第49図14の大木8b式に類似する土器が出土した。文様の大柄な渦巻き文や、剣先状の装飾が特徴である。第89図7の新田東遺跡例は、第53号住居跡出例に後続する土器で、渦巻き状の胴部文様が描かれると考えられる。隆帯と沈線の相違はあるが、高麗石器時代住居跡遺跡例と近似する文様であろう。類例に乏しいが、大山遺跡（谷井ほか 1979）A区第8号住居跡出土土器が比較可能な資料となろう。

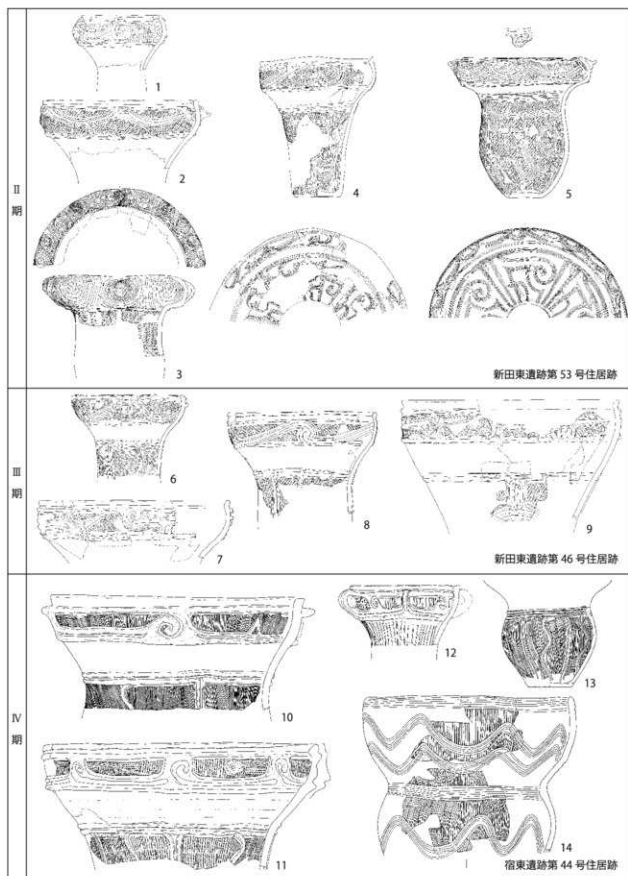
第Ⅳ期（第88図10～14）

加曾利EⅡ式新段階の土器群で、多くの遺跡で連弧文系土器を伴っている。加曾利E式キャリパー形土器は、口縁部文様帯幅が縮小するとともに、長胴化が進むようである。また、地文の燃り糸文はこの段階ではほとんど姿を消しているが、連弧文系土器には採用される例が目立つ。

周辺遺跡の土器をみると、加曾利E式キャリパー形土器が組成の主体を占めており、連弧文系土器の割合が少ないようである。また、連弧文土器自体にも崩れた印象を受けるものが多いことから、時間差ではなく地域的な特徴として考えることが必要であろう。

高麗石器時代住居跡遺跡と周辺遺跡との土器群を比較した。器組成や文様、変遷などには、関東西部地域の特徴が色濃く反映されていると考えられる。

第四期以降は量も少ないため割愛した。近接する八王子遺跡や新田東遺跡でも同様で、第Ⅳ期以降に集落規模が縮小することから、高麗石器時代住居跡遺跡でも同じような傾向をたどる可能性が



第88図 周辺遺跡の土器 (2)

高いと言えよう。

3. 住居跡について

高麗石器時代住居跡遺跡では、検出された住居跡は建て替えや拡張されたものがほとんどで、それらを1軒と数えると、住居跡の総数は13軒となる。検出された住居跡を検討すると、以下に示すように、大きく3種類に分類できそうである。

A類

径が4.50m前後の円形で、検出された住居のなかでは小型に属する。主柱穴が4基で、炉は住居の中心部からやや奥壁寄りに位置している。柱穴は方形か、出入り口方向にやや広がる台形に近い。

2軒の住居跡の柱間とともに2.00m程度である。第4号住居跡では、出入り口施設に関連した柱穴が検出された。第4号住居跡の時期は明らかではないが、第1号住居跡は、第1期に属すると思われる。

B類

奥壁寄りに1基を加えた5基の主柱穴を有する住居跡で、検出されたなかでは、やや大型の住居跡といえる。

第5号住居跡は同一地点で重複しているが、第5b・5c号住居跡は、酷似した柱穴配置をもつことから、拡張された住居跡の可能性が高い。柱間の間隔が出入り口側で狭まっているが、平面形は明らかではない。時期が明確ではないが、出土土器から見ると、第1期から第2期に帰属する可能性がある。

第6a号住居跡も、奥壁寄りに柱穴をもち、総数5基の主柱穴が、将棋の駒のように配置された住居跡である。また住居跡の平面形態も5角形である。第6b号住居跡も第6a号住居跡とほぼ同一の柱穴配置であり、一部では柱穴を共有していることから、拡張されたことは明らかである。炉は主軸線上で、奥壁寄りに位置している。

第5b号住居跡は、径が4.50m～6.50mである。第Ⅲ期に位置付けられる第6号住居跡は、径が5.50m前後である。

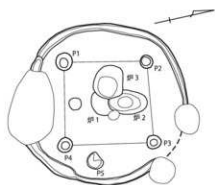
C類

第7・5a号住居跡は、長径5.00m×短径4.00m前後と、長軸方向にやや細長い住居跡である。柱穴は奥壁側にやや幅狭く、入口側に広がる台形状に配置されている。第7号住居跡は、第3号溝跡に壊されているが、入口寄りに1対の柱穴が追加される可能性があることから、或いは6本主柱穴であった可能性も否定できない。

第5a号住居跡は、壁溝が途切れた個所に接して1対の柱穴が設けられている。炉の長軸方向がその間を走ることから、入口部の施設に伴うものではなく、柱穴とするのが妥当であろう。出土土器から、第Ⅳ期に属することが明らかであるが、柱穴の配置や、住居跡の平面形をみると、当初は第6号住居跡のように、5角形の柱穴配置であったが、後に柱穴を追加し、6本柱穴の住居に建て替えられた可能性も考えられる。

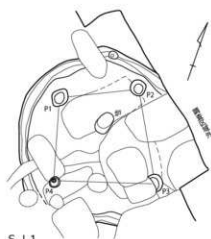
以上のように、高麗石器時代住居跡遺跡で検出された住居跡には、おおよそ3類型が存在する可能性が高まった。柱穴の数と配置は、おおむね住居跡の規模と密接な関係があると思われる。時期的には、第1号住居跡が第Ⅱ期に、第5c・5b号住居跡が第Ⅰ期から第Ⅱ期に、第6号住居跡が第Ⅲ期に、第5a号住居跡が第Ⅳ期に帰属している。少数の事例から傾向を導き出すことは難しいが、類型の相違は、時期差を反映するとともに、居住者数を反映している可能性も考えられる。

ここで、昭和4年と6年に調査された住居跡について触れておく。戦前の調査ではあるが、遺構の見取り図が残されているほか、当時としては画期的な航空写真撮影も行われている。住居跡の平

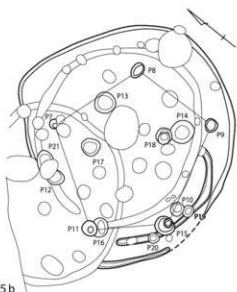


SJ4

A類

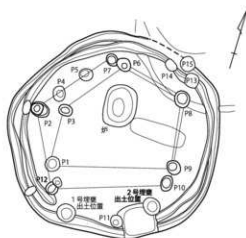


SJ1

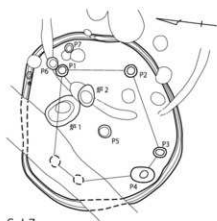


SJ5b

B類

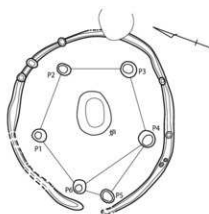


SJ6



SJ7

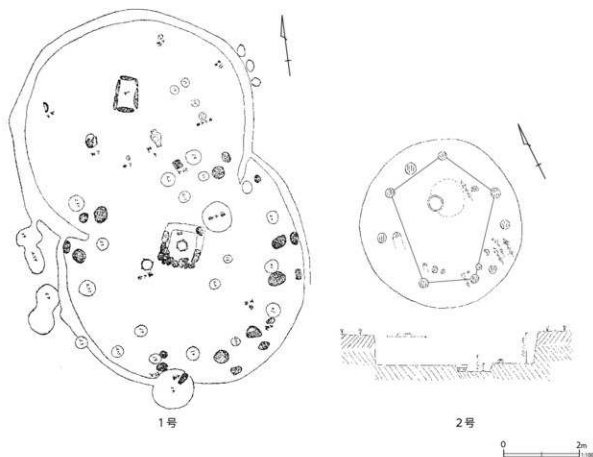
C類



SJ5a



第89図 住居跡の形態 (1)



第90図 住居跡の形態（2）

面形はもとより、調査地点の推測も可能な稀有な事例である。

昭和4年に調査され、後に国の史跡に指定された高麗石器時代1号住居跡は、瓢形として報告されているが、2号炉跡周辺には古い炉跡の痕跡や炉体土器などが存在することから、3度にわたり作り変えられていたと考えられている。いずれの住居跡も、炉跡が主軸線から奥壁よりに位置することや、柱穴の位置などから推して、円形に近い住居であったと考えられる。時期は明確ではないが、残された写真からは、中期後半に帰属する可

能性が高い。見取り図からみて、径は6.00mから6.50mで、住居跡の形態はA類に、規模はB類に近いと考えられる。

一方、昭和6年に調査された高麗石器時代2号住居跡は、見取り図からすると円形の住居跡で、径は4.50m前後と推定される。B類に相当するものと考えられるが、多数の柱穴が検出されていることから、建て替えなどが行われた可能性が高い。恐らく奥壁寄りに柱穴が配置された5本主柱穴の住居であったと推定される。

4. 集落について

高麗石器時代住居跡遺跡第2次、第3次調で検出された住居跡は少なかったが、日高市教育委員

会が実施した確認調査によって、周囲には数多くの住居跡の存在が明らかとなった。また、昭和6

年に調査された高麗石器時代2号住居跡は、一般国道299号を挟んで伸びる台地の北東側に位置する可能性が高いことから、縄文時代中期後半期を中心とする環状集落であった可能性が高まった。

台地の等高線から遺構の分布を想定すると、東西150m、南北85m前後の範囲となる。地形に制約を受けつつも、濃密に遺構が分布しているものと考えられる。

高麗石器時代住居跡遺跡から約6km北側に位置する新田東遺跡は、標高100～110m前後の毛呂山丘陵上に形成された集落遺跡である。当事業団で発掘調査を実施し、縄文時代中期の住居跡7軒、掘立柱建物跡7棟をはじめ、多数の土壌や埋蔵等を検出した。また、集落内の捨て場からは大量の遺物が出土している。遺跡は、毛呂山町教育委員会によっても発掘調査が行われており、100軒以上の住居跡が存在することは確実であろう。

住居跡は、標高約100～110mの等高線に沿うように、丘陵の平坦部から緩斜面部に集中している。道路幅の調査であったため、面的な分布を追うことには限界があるが、特に北側では住居跡に2箇所の集中範囲があり、その間は遺構が少ない。このことから、住居の密集範囲を分けるような空地が存在した可能性が考えられる。また、住居跡群の中間斜面地には、捨て場が形成されていた。

南側では住居跡の分布が希薄である。毛呂山町教育委員会化によって調査された遺跡の西側緩斜面部分にも住居跡が検出されている。以上の様相を併せ見ると、新田東遺跡は地形に制約されていたため、住居跡は丘陵の平坦面から緩斜面部にかけて、馬蹄形のように分布していると考えられる。また、住居跡群の中央には、土壌や掘立柱建物跡などが構築されていたものと推定される。

八王子遺跡は、高麗石器時代住居跡遺跡から約2.7km東の高麗丘陵上に形成された遺跡である。飯能市教育委員会によって発掘調査が行われ、71

軒の住居跡や多数の土壌が発見された。遺構は、標高164～165mの平坦部分と、155～160mの斜面部に構築されている。遺跡は南北に細長い丘陵上に形成されたため、遺構は長楕円形に分布している。住居跡は平坦面の外縁部を縁取るように分布しており、内側に広がることはなかった。

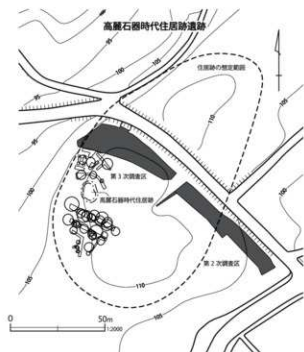
住居跡は空地部分を挟んで6か所の集中部分に区分されている。それぞれの集中部分に各時期の住居が認められることから、構築場所の選定には何らかの規制が存在した可能性が考えられる。

新田東遺跡は、新道式期頃に集落の形成が始まり、本稿の第Ⅱ期から第Ⅲ期頃の住居跡が最も多く、第Ⅳ期頃には数が減少するようである。八王子遺跡も集落形成は新道式期頃で、住居跡数の増加も新田東遺跡とよく似た傾向を示し、第Ⅳ期以降には継続しないようである。

以上2遺跡の傾向を踏まえて、高麗石器時代住居跡遺跡を検討すると、グリッド出土とはいえ、新道式ないしは藤内式と考えられる土器が含まれているので、周辺にこの時期の遺構が存在する可能性も高いと言える。また、限定された範囲とはいえ、住居跡は第Ⅳ期までであり、これ以降の土器がほとんど出土していないことから、集落は第Ⅳ期でほぼ終了するか、極めて小規模となり、環状集落は解体していったものと考えられ、周辺の同時期集落と歩調を合わせた傾向にあるものと推測される。

高麗石器時代住居跡遺跡の周辺で、中期後葉に丘陵やそれに接する地域に営まれた集落は、住居総数が70軒から100軒程度と推定される。総じて集落の立地場所がさほど広くないことから、建てられる住居の軒数には自ずと制約が課されているともいえる。また、河川流域毎にこのような集落遺跡が少ないことは、集落ごとに居住する人数が増加する半面、周辺の遺跡数が減少することと相関関係があることを示している。

第92図には、集落遺跡の継続時期を示した。資



第91図 周辺集落の規模

越辺川流域			
道路名	60	67	66
時期	白綾	上台	五領
新道			
藤内			
井戸尻			
EⅠ古			
EⅠ新			
EⅡ古			
EⅡ新			
EⅢ古			
EⅢ新	?		
EⅣ古			

葛川流域

59
新田

飯盛川流域

74	75	76	77
若宮	鶴中	高倉	新石

二階川流域

88	89
牛原	御新

高麗川流域

道路名	1	2	8	9	14	55	56	57	73
時期	高麗	平谷	東原	小竹	久保	上殿	表目	まま	花影
新道									
藤内									
井戸尻					?				
EⅠ古									
EⅠ新									
EⅡ古									
EⅡ新									
EⅢ古									
EⅢ新									
EⅣ古									

小野川流域

26	27	10	11	83	85
大日	八王	明婦	稲荷	鶴丘	上組

小野川流域

道路名	15	16	19
時期	宿東	寺脇	西橋
新道			
藤内			
井戸尻			
EⅠ古			
EⅠ新			
EⅡ古			
EⅡ新			
EⅢ古			?
EⅢ新			
EⅣ古			

南小野川流域

21	18	42	41	84	22	23	43	24	25	30
二反	宿方	下川	茅久	御伊	下向	向山	芦刈	上原	向原	株木

入間川流域

道路名	39	53	54	51	46	99	100	
時期	加能	金	金Ⅱ	丸山	宮地	亀井	東台	西ノ
新道								
藤内								
井戸尻								
EⅠ古								
EⅠ新								
EⅡ古								
EⅡ新								
EⅢ古								
EⅢ新								
EⅣ古								

遺跡名の詳細

22下向山	39加能里	41茅久保
42下川崎	43芦刈場	53金堀沢
54金堀沢Ⅱ	57まま上	59新田東
77新右衛門	84御伊勢原	89御新田
西ノ原		

第92図 周辺遺跡の時期

料は十分ではないが、中期集落は各河川流域ごとに存在し、おおよそ新道式期から藤内式期頃に集落の形成が始まったことが分かる。その後、中期終末まで継続する場合や、勝坂式終末期で終了する場合、勝坂式末期に始まり、加曾利EⅡ式頃に終了する遺跡など、継続時期の幅は様々であるが、各河川流域の遺跡には、加曾利EⅠ式やEⅡ式期の継続期間の短い遺跡が点在する傾向があるようである。この時期、八王子遺跡や新田東遺跡では、住居跡の軒数が増加することが明らかなことから、短期間の遺跡は、或いは分村のような性格を有していたものかもしれない。

5. 黒曜石の産地について

高麗石器時代住居跡遺跡から出土した黒曜石製の石器と剥片について、産地推定を試みた。分析した資料は、非掲載の剥片を含めて総数29点である。分析結果では不明な資料もあるが、産地が明らかなのは、男女倉群・星ヶ台群を主体に、少量の和田峠群が含まれるとの分析結果であった。

八ヶ岳周辺に産地を持つ黒曜石が多かったことは、高麗石器時代住居跡遺跡の位置とも無関係ではなからう。埋設伏襲に端的に見られるように、甲信地方との濃密な交渉も想定されることから、黒曜石の流通も、このようなモノや情報の流れの

高麗川流域の東原遺跡、花影遺跡、小畔川流域の稲荷遺跡、鶴ヶ丘遺跡、上組遺跡、宿東遺跡、南小畔川流域の二反田遺跡、御伊勢原遺跡、上原遺跡などは、加曾利EⅡ式新段階頃から始まる遺跡である。環状集落に代表される遺跡は、加曾利EⅡ式新段階頃に集落の解体が始まり、続く加曾利EⅢ式頃にはほとんど住居跡が見られなくなることから、新たな地に集落を形成し始めたことを示すものとも考えられよう。宿東遺跡は加曾利EⅢ式期の住居跡が最も多いが、他の遺跡では件数も少なく、小規模な集落が主体となる反面、遺跡数は増加する傾向にあると言えよう。

一端を表している可能性がある。

分析資料には、神津島の西南西にある恩馳島を産地とする黒曜石が含まれていたことは注目値する。黒曜石を島嶼地域から搬入するためには、黒潮を乗り越える航海技術が必要ことから、專業化した集団が関与していたとの見解もある。高麗石器時代住居跡遺跡から出土した恩馳島産の黒曜石も、そのような由来を持っていた可能性も考える必要があろう。いずれにしても、周辺地域も含めて、さらに資料の分析を進めてゆく必要があろう。

引用・参考文献

- 荒井幹夫 1976 『羽沢遺跡第3地点』『富士見市文化財報告Ⅸ』 文化財報告 第11集 富士見市教育委員会
池谷信之 2009 『黒曜石考古学—原産地推定が明らかにする社会構造とその変化—』 新泉社
石塚和則 1986 『将監塚—縄文時代—』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第63集
石塚和則 1997 『宮地遺跡』 狭山市文化財報告 第19集
石塚和則 2003 『丸山遺跡』 狭山市遺跡調査報告書 第13集
石塚和則 2012 『型式転換期の実態—勝坂式最終末・加曾利EⅠ式古段階の諸相—』『埼玉考古』第47号 埼玉考古学会
稲村垣元 1929 『入間郡高麗村発見の石器時代住居址』『埼玉史談』第一巻第一号 埼玉郷土会
今井 堯 坪田幹男 鍋島直久 1996 『西ノ原遺跡』 埼玉県大井町遺跡調査会
上野真由美 細田 勝 2012 『新田東遺跡』 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第390集
大屋道則・井上幸雄・上野真由美他 2006 『石器材料及び石器の理化学的分析値①』『研究紀要』第21号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
大屋道則・上野真由美・新屋雅明他 2007 『石器材料及び石器の理化学的分析値②』『研究紀要』第22号 財団法人埼玉県埋蔵

文化財調査事業団

- 大屋道則・上野真由美他 2008 「石器材料及び石器の理化学的分析値③」『研究紀要』第23号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 大屋道則・上野真由美他 2009 「石器材料及び石器の理化学的分析値④」『研究紀要』第24号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 岡本健一ほか 1993 『谷津・二反田・下向山』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第131集
- 書上元博 金子直行 1996 『八木上/八木/八木前/上広瀬北/森坂北/森坂』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第165集
- 加藤清次郎ほか 1955 『高麗郷土史』高麗郷土史研究会
- 金子直行 1990 『八木上遺跡』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第91集
- 金子直行 2001 『まま上遺跡』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第242集
- 栗原文蔵・今泉泰之 1973 『岩の上・埴子山』埼玉県遺跡調査報告書 第1集 埼玉県教育委員会
- 黒坂慎二 2008 『牛原/御新田/番匠・下道/横沼新田/北谷』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第353集
- 埼玉県 1945 『埼玉県史 第一巻 先史原野時代』埼玉県史編纂委員会
- 齊藤祐司ほか 1993 『金堀沢Ⅱ遺跡』入間市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告 第14集
- 佐々木保俊ほか 1976 『池田遺跡発掘調査報告書』新座市埋蔵文化財報告第Ⅱ集 新座市教育委員会
- 大隅二郎 1957 「高麗小学校校庭竈穴住居発掘報告」『埼玉史談』第四巻第二号 埼玉県郷土文化会
- 高橋 敦ほか 1980 「松ノ木遺跡第13地点」『富士見市中央遺跡群Ⅲ』文化財調査報告 第19集 富士見市教育委員会
- 谷井 彪ほか 1979 「大山」埼玉県遺跡発掘調査報告書 第23集 埼玉県教育委員会
- 谷井 彪ほか 1982 「縄文中期土器の再編」『研究紀要』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 富元久美子 1998 「加能里遺跡第16・20・21次調査」『飯能の遺跡 (25)』飯能市教育委員会
- 中島 宏 1977 『金堀沢遺跡』入間市金堀沢遺跡調査会
- 日高市史編集委員会 日高市教育委員会 1989 『日高市史 原始・古代編』日高市教育委員会
- 日高市史編集委員会 日高市教育委員会 1992 『日高市史 通史編』日高市教育委員会
- 宮井栄一 1991 『古井戸ー縄文時代ー』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第75集
- 柳戸信吾 1998 「中郷遺跡第1～3次調査」『反応の遺跡 (26)』飯能市遺跡調査会
- 柳戸信吾 村上達哉 1999 『大日向遺跡・八王子遺跡』飯能市遺跡調査会
- 吉田 格ほか 1998 『東京都青梅市 駒木野遺跡発掘調査報告書』青梅市遺跡調査会